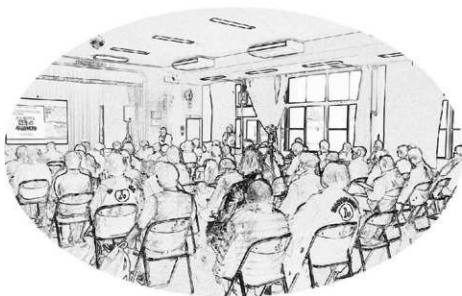


令和6年度 地域の特色ある埋蔵文化財活用事業関連シンポジウム

驚きの与論城跡 シンポジウム記録集



令和7（2025）年3月
与論町教育委員会

【目次】

【例言】・【事業執行体制】	1
シンポジウムの会場風景	2
配布アンケート	3
アンケート集計結果	4
講演・配布資料	5
講演1「奄美・沖縄のグスクと与論城跡」 池田榮史（國學院大學研究開発推進機構 教授）	6
講演2「日本の城からみた与論城」 赤司善彦（大野城心のふるさと館 館長）	12
報告「与論城跡の発掘調査成果について」 南 勇輔（与論町教育委員会 主査（学芸員））	16
配布資料1「古代・中世の奄美・与論」 永山修一（ラ・サール学園 非常勤講師）	24
配布資料2「与論城跡と城集落」 麓 才良（与論町文化財保護審議会 会長）	31
サイエンスカフェ・トークセッション トークブース2 「地域の文化遺産としての城跡」シンポジウム参加者の声	39

【例言】

- (1) この記録集（以下、「本冊子」もしくは「冊子」）は、令和6年度に文化庁の国宝重要文化財等保存・活用事業補助金を受けて実施した、地域の特色ある埋蔵文化財活用事業の一環で作成した。
- (2) 本冊子は、令和7年2月11日（火、祝日）に与論町中央公民館で開催した、シンポジウム「驚きの与論城跡」の内容を記録・再編集して配布を行うことで、事業対象の埋蔵文化財である「与論城跡」の価値について深く理解してもらうために作成した。
- (3) 本冊子の編集は、事務局である生涯学習課の南が担当した。
- (4) 本書に掲載している各講師の原稿は、シンポジウム当日に配布資料として作成してもらったものを基に、一部編集・修正して掲載している。原稿の体裁は基本的に各講師が作成したものに準じている。

【事業執行体制】

実施組織

事業主体	与論町 町長 田畑 克夫
責任者	与論町教育委員会 教育長 中山 義和
事務責任者	与論町教育委員会 課長 松村 誠司
事業担当	与論町教育委員会 主査（学芸員）南 勇輔
シンポジウム	講師 池田榮史 國學院大學授（考古学） 赤司善彦 大野城市心のふるさと館館長（考古学） 永山修一 ラ・サール学園非常勤講師（文献史学） 蘆 才良 与論町文化財保護審議会会長（郷土史）

コーディネーター	鮫島えりな 鹿児島県教育庁文化財課 西野元勝 鹿児島県歴史・美術センター黎明館
オブザーバー	町岡安博（一社）ヨロン島観光協会

驚きの与論城跡

シンポジウム

与論城跡は、従来の見方を覆したとも取れます

【開催】 令和7年（2025年） 2月11日（火） 9時～11時30分

【会場】 与論町中央公民館 2階大ホール

8:30 開場
9:00 開会あいさつ
9:10 開演：埋蔵文化財活用推進協議会 池田 榮史 教授
9:15 講演：与論城跡の考古学と歴史 池田 榮史 教授（要）
9:30 講演：大野城跡のふるさとと歴史 赤司 善彦 講師
10:00 講演：与論城跡の考古学と歴史 赤司 善彦 講師
10:15 シンポジウム：与論城跡の考古学と歴史 赤司 善彦 講師
10:25 トークショー：与論城跡の考古学と歴史 赤司 善彦 講師
10:30 トークショー：与論城跡の考古学と歴史 赤司 善彦 講師
11:30 閉会のあいさつ

【問合せ】 与論町教育委員会 Tel: 0997-97-2441

驚きの与論城跡

シンポジウム

与論城跡は、従来の見方を覆したとも取れます

【開催】 令和7年（2025年） 2月11日（火） 9時～11時30分

【会場】 与論町中央公民館 2階大ホール

8:30 開場
9:00 開会あいさつ
9:10 開演：埋蔵文化財活用推進協議会 池田 榮史 教授
9:15 講演：与論城跡の考古学と歴史 池田 榮史 教授（要）
9:30 講演：大野城跡のふるさとと歴史 赤司 善彦 講師
10:00 講演：与論城跡の考古学と歴史 赤司 善彦 講師
10:15 シンポジウム：与論城跡の考古学と歴史 赤司 善彦 講師
10:25 トークショー：与論城跡の考古学と歴史 赤司 善彦 講師
10:30 トークショー：与論城跡の考古学と歴史 赤司 善彦 講師
11:30 閉会のあいさつ

【問合せ】 与論町教育委員会 Tel: 0997-97-2441

シンポジウム広報用 A4チラシ（左）とA2ポスター（右）

シンポジウムの会場風景



会場全景



トークセッションで説明する龍氏



講師・コーディネーター・オブザーバー



トークセッションの活用事例を見る参加者



会場全景2



会場の後ろまで埋まる参加者と背景の石垣画像

配布アンケート

令和7年2月11日

アンケートへのご協力をお願い

与論町教育委員会事務局

本日はシンポジウム「驚きの与論城跡」にご参加下さり誠にありがとうございます。今後の埋蔵文化財保護行政推進のための参考資料としてアンケートを実施することにしました。是非、率直な気持ちや意見を聞かせてください。

1 現在の主たる住居（住んでいる場所）はどこですか。

与論町内 / () 都・道・府・県 () 市・町・村

2 年齢 10代 / 20代 / 30代 / 40代 / 50代 / 60代 / 70代以上

3 シンポジウムを通して与論城跡の文化財としての価値の理解は深まりましたか？（該当項目に○）

ア 深まった / イ 変わった / ウ どちらでもない

理由（自由記述）

[]

4 シンポジウムへの満足度について教えてください（該当項目に○）。

ア 満足 / イ 不十分 / ウ どちらでもない

理由（自由記述）

[]

5 今後の与論城跡の活用としてどのようなことを望みますか。（是非という項目に○を3つまで）。

①教育面での活用 ②観光面での活用 ③町外へのPR活動 ④城跡を活用したイベント開催

⑤パンフレット等の充実 ⑥展示施設の充実 ⑦他の遺跡や文化財などと合わせた活用

⑧その他（自由記述）

[]

6 今後、城跡や島の文化財に関するイベントとしてどのようなものが開催して欲しいですか。

（是非という項目を2つ）。

①講演会・シンポジウム ②現地案内 ③体験学習（芭蕉布・茅葺等） ④清掃活動

⑤その他（自由記述）

[]

アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。

アンケート集計結果

参加者 90 人、アンケート回収枚数 48 枚（2名分の記載有り）

1 現在の主たる住居（住んでいる場所）はどこですか（以下、単位「人」）。

与論町 39

県内 和泊町1

県外 千葉県1 埼玉県 2 東京都1 大阪府1 福岡県1 沖縄県2

2 年齢

	島内	県内	県外	合計（人）
10代	0	0	0	0
20代	0	0	1	1
30代	1	0	2	3
40代	7	1	1	9
50代	13	0	2	15
60代	9	0	1	10
70代	10	0	0	10
	40	1	7	48

20代以下に関心を持ってもらうことが今後の課題



3 シンポジウムを通して与論城跡の文化財としての価値の理解は深まりましたか？（該当項目に○）

ア 深まった 43

理由 奄美と与論城跡のちがいと今後の活用方法。

歴史的な流れを含めて理解が深まった。

大体は聞いてました。

歴史背景と本土の城の構造、与論くすくの違い。

海を通じての交流の一点としての与論の価値を再確認した。

知らないことが多かった。

発掘調査成果 歴史的背景が分かりやすく解説されていた。

日本や中国も含めての与論城の認識を知れた。

歴史的な背景と新たに分かったことがあ何えて勉強になりました。

中世の山城と比較分類が出来て面白かった。

国指定になった理由が理解できました。大変興味深いお話の数々、誠にありがとうございました。

すぐおもしろかったです！！城の基礎知識を学べた。

文化財に。

イ 変わった 5

理由 出てきた場所や内容について

ウ どちらでもない 1

理由 スタートだったと思います

4 シンポジウムへの満足度について教えてください（該当項目に○）。

ア 満足 42

理由 新しい知識が得られた。聞きづらい部分があいくつかありました。

短時間で価値がわかった。

歴史や文化にふれる機会となった。

先生の進行のしかた、内容がとてもよかった。

池田先生のお話。

赤司さん先行のサイエンスカフェ。

新しい知識を得られた。

全国的な比較において、与論城の価値を再確認できた。

地元の人と話しながら進めるのが双方向的でよかった。

満足だが、もう少し詳しく知りたかった。

イ 不十分 1

理由 南さんのスライドで使用された資料のコピーが欲しい。

ウ どちらでもない 2

理由 貴重な資料をいただきました。勉強します。

後半をもう少しまとめても良かったか。又は始めから長めに設定。

未記入 4

理由 難しくして少し理解できませんでした。

スクリーンの方が小さくて見えづらかった。

5 今後の与論城跡の活用としてどのようなことを望みますか。(是非という項目に○を3つまで)。

①教育面での活用 28

②観光面での活用 27

③町外へのPR活動 11

④城跡を活用したイベント開催 16

⑤パンフレット等の充実 9

⑥展示施設の充実 12

⑦他の遺跡や文化財などと合わせた活用 14

⑧その他(自由記述)

- ・イベントなども良いとは思いますが、聖地として厳肅な雰囲気は必要だと思う。
イベントは別の場所でする。
- ・観光として活用したいが、開発しすぎは後世に価値が変わる事(インスタばえとかは消える)があるので良くない。
- ・与論城跡は普段草におおわれているので、全景が分かりづらいので、地形模型や城内地図があった方がよい。
また発掘で出土した遺物を見れるようにしてほしい。
- ・島人の遊び場や伝統文化の発表等々。
- ・地域に貢献できる史跡として話してほしい。
- ・まずは基本的な説明から。(活用)の次のステップへ。
- ・教育観光の一つの目玉として。
- ・⑦島全体まるごとジオパーク。
- ・桜並木道をつくる!!
- ・⑥サザンクロスセンターでの展示が足りないように思う。

6 今後、城跡や島の文化財に関するイベントとしてどのようなものが開催して欲しいですか。

①講演会・シンポジウム 27

②現地案内 31

③体験学習(芭蕉布・茅葺等) 16

④清掃活動 9

⑤その他(自由記述)

- ・草刈りなど十分に整備されていないと思うことが時々ある。
- ・既にある行っている(十五夜踊、角力大会、子ども食堂、お祭りなど)城(グスク)で行う意義を皆、町民がまず再確認することも大切だと思う。
- ・龍頭を削った過去をくり返さないで欲しい。
- ・島全体を美しい島にしたい又島人のモラルを上げたい。
- ・伐採活動、石垣が見えやすい様に、沖縄島が見える様に赤木(外来種)の大木を切断して当時の平坦面を整備できたらいい。
- ・今回のような専門家の方々講演会では、もっと聴きたいと思います。
- ・考古学・文化人類学入門セミナー。

奄美・沖縄のグスクと与論城跡

國學院大學研究開発推進機構 教授 池田 榮史

1 はじめに

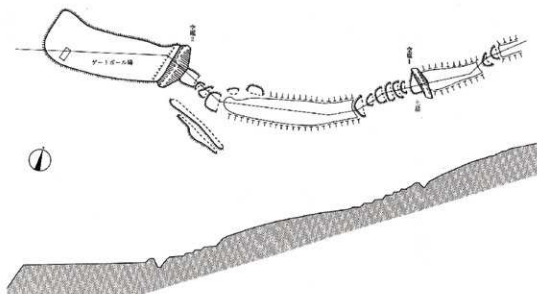
九州島から台湾島までの間、約1,200kmの海洋中に点在する大小約200の島々を総称して日本では南西諸島、世界的には琉球列島と呼んでいます。現在の行政区画では九州島に近い約40島は鹿児島県、列島のほぼ中央に位置する沖縄島から台湾までの間の約160島は沖縄県です。これらの島々の中で、九州島の南端から大隈諸島、トカラ列島、奄美諸島、沖縄諸島までは、晴れて視界が良い天候の日であれば隣り合う島を視認することができます。このため、この間の島々では先史時代以来、疎密の差はあるものの継続的な交流が行われていました。これに対して、沖縄諸島と宮古諸島の間は約300km離れていることもあり、約1,000年前(11世紀)に至るまで相互間の安定的な往来はありませんでした。ただし、宮古諸島と八重山諸島の間では、中間に位置する多良間島を含めて先史時代からの交流が見られます。このような地理的歴史的状况を踏まえ、琉球列島の中の大隈諸島から沖縄諸島までの島々を北琉球、宮古諸島から八重山諸島までを南琉球の2つに区分する考え方や、北琉球について吐噶喇列島を境界として北部圏と中部圏に分け、2分案の南琉球を南部圏と呼び替えて、3つに区分する考え方が出されています。

2 奄美諸島の城郭遺跡

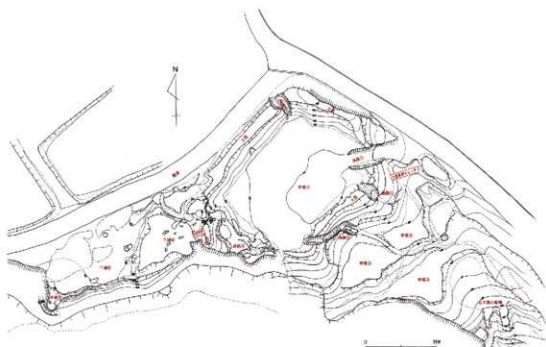
琉球・沖縄の歴史研究では琉球列島社会が大きく変貌する11世紀から13世紀後半までの間を「グスク時代」と呼んでいます(高宮廣衛1966)。グスク時代の名称の元となった「グスク」は沖縄諸島に残された城郭遺跡のことであり、本来は琉球列島全域で用いられる名称ではありません。実際に調べてみると、奄美諸島には「グスク」名称が用いられていない城郭遺跡がたくさんあります。例を挙げれば、旧名瀬市(現在は笠利町と合併して奄美市)が実施した市内グスク分布調査では、確認した城郭遺跡45箇所の中で「グスク」名称がついていたのは5箇所しかありませんでした。「カミヤマ」や「タテヤマ」、「アジ屋敷」、あるいは「～ジョウ」、「～シロ」の呼び方が一般的で、中には名称のない城郭遺跡もありました。このことは旧名瀬市内には「グスク」と呼ばれる遺跡はほとんどないことを示しています(名瀬市教育委員会2001)。

また、旧名瀬市内で確認した城郭遺跡は自然丘陵の尾根を掘り切り、これで区切った複数段の平地を造ることが一般的で、丘陵斜面はそのままか、人工的に削った急斜面になっています。この平地と斜面を利用した構造は基本的に日本本土に見られる中世山城に類似しており、旧名瀬市内の城郭遺跡は日本本土の中世城郭に類例が求められると言って良いと思われます。ただし、残念なことこれらの遺跡では遺物を採集できることがほとんどなく、構築年代は良くわかりません。その中で、古見方の伊津部勝グスクでは1975年に沖縄県立博物館で開催されたグスクを取り扱った展覧会の際に現地を訪れた名嘉正八郎・知念勇・中山清美さんによって、12・13世紀代に位置づけられる白磁や青磁、カムイヤキ製品が採取されています(沖縄県立博物館1985)。

また、奄美諸島に分布する城郭遺跡の中には喜界島七城遺跡のように丘陵頂部を利用し、一部に石積みを持つ略方形の土塁を作り出し、後背部分に堀切を設けた例もあります。土塁の基底部分は約60mを測り、内部は掘り凹められて平らになっており、構造的には日本中世に見られる居館遺構に類似します。年代がわかる遺物に土塁の外斜面から出土したラマ式連弁文青磁椀(上田青磁分類C-II-a類)があり、15世紀前～中葉に位置付けられます(上田1982)。言い伝えでは七城遺跡は壇ノ浦合戦に敗れた平氏の一族



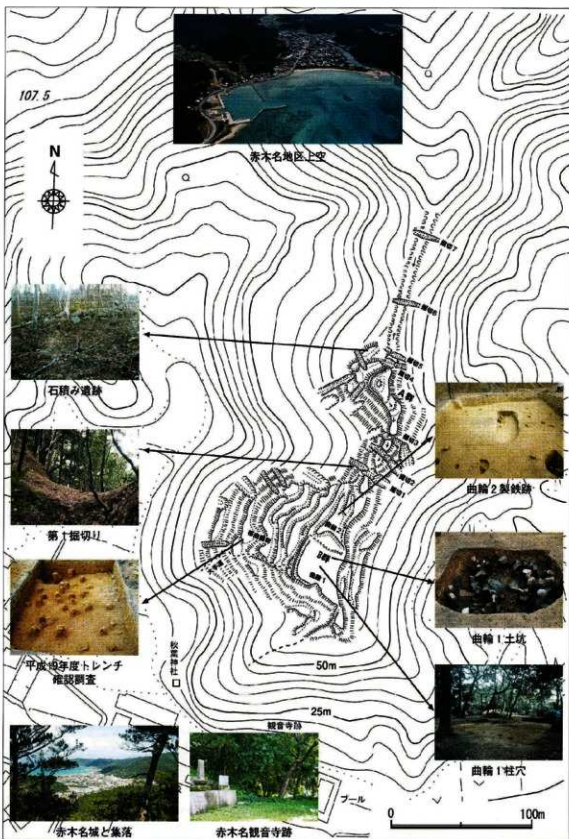
第1図 奄美大島伊津部勝グスクパル（城原）遺跡（伊津部勝グスク）見取り図（名瀬市教育委員会 2001 より）



第2図 喜界島七城遺跡測量図及び調査区設定状況図（池田 2009 より）

である平賀盛が文治元（1185）年に手勢 200 名余りと逃れてきて 3 年間滞在したとされていますが、この遺物の年代とは合いません（池田 2009）。

これに対して、丘陵頂部に平場を作り、さらにその周囲に帯状の平場を巡らしているのは奄美市（旧、笠利町）赤木名グスク遺跡です。標高 123.7m の山頂から眼下の赤木名集落に向かって伸びる山陵の尾根と斜面部に複数の平場を設け、尾根には複数の堀切、斜面には多数の堅堀を設けています。山陵頂部の平場に設けた調査区の最下層からは 11 世紀後半～12 世紀前半に位置付けられる中国産白磁玉縁碗（太宰府市教育委員会 2000）、カムイヤキ製品片、滑石製石鍋片が出土しており、頂部平場にはこの時期に何らか



第3図 奄美市赤木名城縄張り図(案) (奄美市教育委員会 2008 より)

の遺構があったと考えられています。ただし、山稜の尾根部分と斜面部を利用して平場、堀切や堅堀については15・16世紀のものと考えられ、赤木名グスク遺跡には時間的推移過程があったと考えられます（笠利町教育委員会 2003、奄美市教育委員会 2008・2015）。

3 与論城の特徴

奄美諸島の中で、石積みを持つ城郭遺跡例はほとんどありません。この点において、与論島与論城跡と沖永良部島後蘭孫ハグスクは特別な存在です。与論城跡は標高87mを最高所とする琉球石灰岩段丘の頂部丘陵に占地しており、南北に伸びる丘陵の西側は急峻な断崖であるのに対して、東側は緩斜面になっています。丘陵頂部を中心に多重の石積みを巡らす構造は沖縄諸島に見られる石積みグスクによく似ています。これまでに行われた確認調査では13世紀後半から15世紀前半を中心とする中国産陶磁器が出土しており、築造年代も沖縄諸島のグスクとほぼ並行すると考えられます（与論町教育委員会 2024）。

与論城は島の最高所である石灰岩段丘の西端に作られており、城郭を構築する場所の条件としては理にかなった位置にあります。築造に関する伝承では琉球北山王の三男である王舅や琉球中山王との関係がある花城真三郎という人物の関与が語られています。このことは与論城跡と沖縄島との間に何らかの関係があったことを反映していると考えられますが、王舅や花城真三郎が実在したかどうかは定かではありません。

4 与論城（グスク）の位置付け

奄美諸島の沖縄島に近い南部の与論島や沖永良部島には沖縄島のグスクと類似する構造を持つ与論城跡や後蘭孫ハグスクがあります。これに対して、北部の奄美大島や喜界島では丘陵先端部分に占地し、平場や堀切を持った構造の伊津部勝グスクや七城遺跡が造られています。また、奄美諸島北部では日本の中世城郭の影響を受けたと思われる土塁や丘陵斜面の平場、堅堀などを持った赤木名城も存在します。年代的にはこれらの奄美諸島北部の城郭遺跡から出土する遺物に古い要素が見られ、石積み構造を持つ南部の城



第4図 後蘭孫八城跡現況測量図（主税 2024 より）

郭遺跡は比較的新しく位置付けられるようです。このことからすれば、日本の影響を受けた「中世城郭」が先行して奄美諸島北部で成立し、その後には沖縄諸島の影響を受けた「グスク」的な城郭遺構が奄美諸島南部に導入されたと考えることができるかもしれません。

沖縄島内のグスクの中で、考古学的な調査成果によって変遷過程が明らかとなった今帰仁グスクの場合、13世紀中頃の段階で柵列を持つ暫的な施設が先行して構築され、13世紀末～14世紀初頭に石積みを巡らした構造が登場します（金武正紀 2004）。これを含め、沖縄諸島での石積み構造を持つグスクの出現は13世紀末～14世紀初頭以降のことと考えられています。これに対し、与論城跡では13世紀後半段階の出土遺物が認められるものの、この段階には城郭的な構造物はなく、丘陵上に石積み囲いを持たない集落遺跡があったと考えられます。しかし、今後の調査で13世紀後半段階の石積みが確認できた場合には、沖縄諸島で最も古い段階に構造化したと考えられる今帰仁城よりも与論城跡が先に築かれたことになります。そうであれば、与論城跡は沖縄諸島のグスクよりも先行して出現したこととなり、与論城跡は沖縄諸島におけるグスクの成立に深く関与することになります。

また、今後の調査によって与論城跡の城郭化が14世紀後半以降に進むことが明らかになった場合には、その背景には沖縄諸島で形成されつつあったグスク社会の影響があったと考えられます。これについては、中国で南宋が滅亡（1279年）した後、元の支配下に入った中国江南地域沿岸部の商人をはじめとする人々が、13世紀末～14世紀前半にかけて八重山・宮古諸島から沖縄諸島へと交流や交易関係を拡大した可能性を考えています。この働きかけに対して沖縄諸島にいた勢力の一部がこれに応え、それまでの奄美諸島を通じた日本との交流・交易から、中国江南地域沿岸部との交流交易へと軸足を移したと考えるのです。沖



第5図 今帰仁城跡平面図（金武 2004年より）

琉球列島におけるグスクの成立はちょうどこの時期に当たっており、それまでの日本との関係に基づく琉球列島の社会的秩序がモンゴル襲来（1274年文永の役・1281年弘安の役）と鎌倉幕府の滅亡（1333年）、これに続く南北朝の騒乱（1336～1392年）によって動揺した結果、中国江南地域との交流交易に基づく琉球列島社会秩序の再構築を図る動きが生まれ、この動きがグスクの成立に関わった可能性が高いと考えるのです。

この点において、奄美諸島と沖縄諸島の境界に設けられた与論城跡は琉球列島社会の大きな歴史転換を物語る重要な位置を占めていると言っても良いと考えられます。これまで奄美諸島の歴史・文化は鹿児島や沖縄における研究成果を基底におき、その解釈論の中に位置付けることが一般的でした。しかし、近年の考古学や歴史学研究はこの傾向を打ち破り、奄美諸島の資料によって自らの歴史を構築することができるまでになりました。与論城跡の調査研究はその最先端を行く試みであり、今後の調査研究を積み重ねることによって、奄美諸島を日本史あるいはアジア史に位置付ける作業が進んでいくことを期待したいと思います。

参考文献

奄美市教育委員会 2008「赤木名城」

2015『鹿児島県奄美市史跡赤木名城跡保存管理計画書』

池田榮史 2009「鹿児島県大島郡喜界島所在志戸桶七城遺跡試掘調査報告 志戸桶七城遺跡Ⅰ」『琉球大学考古学研究室学術調査報告』第1集（平成20年度琉球大学中期計画実現推進経費による研究プロジェクト「考古学による奄美諸島中世史構築の試み」による学術調査）

2019「琉球列島史を掘りおこす-11～14世紀の移住・交易と社会的変容-」『中世学研究』2（琉球の中世）

上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
沖縄県立博物館 1985『特別展グスクグスクが語る古代琉球の歴史とロマン』図録

笠利町教育委員会 2003「赤木名グスク遺跡」『笠利町文化財報告』第26集

金武正紀 2004「考古学からみる今帰仁城跡の歴史」『グスク文化を考える』沖縄県今帰仁村教育委員会
国分直一 1966「南島の先史文化」『考古学研究』第13巻2号

高宮廣衛 1966「沖縄」『日本の考古学』Ⅳ（古墳時代 上）河出書房新社

太宰府市教育委員会 2000「太宰府条坊跡XV-陶磁器分類編」『太宰府市の文化財』第49集

主税英徳 2024「第7章 後蘭孫八城跡の測量調査」『和泊町の歩み』和泊町教育委員会

名瀬市教育委員会 2001「奄美大島名瀬市グスク詳細分布調査報告書」『名瀬市文化財叢書』3

与論町教育委員会 2024「与論城一町内遺跡発掘調査事業に伴う与論城跡発掘調査報告書一」

『与論町埋蔵文化財発掘調査成果報告書』（2）

日本の城からみた与論城

大野城心のふるさと館 館長 赤司 善彦

はじめに

日本国内の山城のうち古代（飛鳥・奈良時代）には30弱築城されているだけで、その後の中世から戦国時代になると、全国各地に築城され、その数は5万とも10万ともいわれている。正確な城の数は分からない。数もそうだが実体もよく分かっていない。戦国時代の山城でも本来の城の名称や城主も不明なものが多い。多くの城に名前がついてはいるが、それはその地の地名や伝承から付けられたものがほとんどである。さらには、いつだれが築城したのかということが確実に分る城は、実は非常に少ないのである。

それは、多くの山城が領士の居城ではなく、戦が始まる前に戦術的に築城されて、戦が終わると使用されなくなる城だからである。あくまでも臨時的な城なのである。そのため地形の変更も小規模で、出土遺物も少なく時期の特定も容易でない。いざが終われば使用済みになり、時に平地は畑になり、作業に邪魔な石垣は除かれるなどして人為的な変更がなされることになる。さらには、暴風雨などの災害で土壘が壊れたり、壕が埋まったりするのである。そのため、発掘調査をしても、山城がどのように守りを固めたのかというような実態解明は難しいのが実情である。

さて、与論グスクは発掘調査により、立地や石垣の様相あるいは平面的な空間利用の状況が判明した。その結果、琉球の様式に似た構造で、防御性を高めた城郭だということが明らかにされた。いつ誰がどのような理由で築城したのかは、伝承がわずかに残っているだけで不明点が多い。伝承は地元での言い伝えと、後の時代の書物に取り上げられている場合があるが、それが史実であるかどうかは判断が難しい。ほとんどの城について、いつだれが何のために築いたのかわからないのが当たり前とっていただきたい。説明板にも「伝承では・・・だといわれている」という書き方は注意が必要である。

ここでは、NHKのクイズバラエティ「チコちゃんに叱られる」風に、日本本土の山城についてクイズ形式での基本的な疑問に答えて、与論グスクの意義をあらためて問い直してみたい

問い 中世の山城はどのような構造なのか？

答え：敵を混乱させて撃退する場所

山の複雑な地形をうまく利用して、登るのをむずかしくして、登って来られないよう防御施設をつくるのが優先される。とくに崖面の利用は効果的である。さらに居住や儀式あるいは防御などの機能を果たすために防御施設で囲まれた平坦面を曲輪と

呼び、そこに建物などを建てていた（図1）。

・防御施設 城郭で最も重要なのは敵を容易に侵入させないことである。平地の場合であれば、深い堀もしくは高い城壁が有効だと思われるが、山の場合に効率的な障害は山の斜面を利用することであろう。最も古い山城の防御施設は切岸である。人工の急斜面を作り出したもので、自然の斜面を切り崩したのや盛土をして斜面にしたものなどがある。曲輪の周囲にセットで作られることが多い。

堀は、防御や区画のために掘られたもの。水堀と空堀があり、種類には丘陵を切断した堀切、斜面に縦方向に長く掘った塹壕、丘陵斜面への侵入を防ぐために横方向に掘った横堀などがある。

土壘は曲輪の周縁や出入り口の周囲に築いた。グスクでも曲輪の周囲に高くそびえた石垣をともなう城壁が

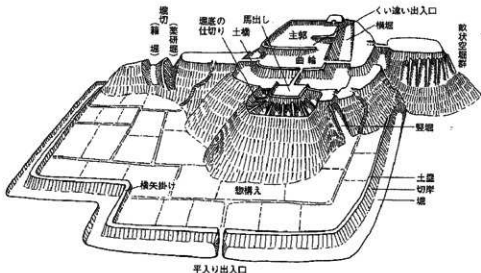


図1 山城の施設名称(文化庁2013『発掘調査の手引き』各種遺構編)

発達し、本土とは異なる展開があった。

石垣は積み石を主体に背後の裏込め石とともに構築している。特に16世紀以降になると広い面積の曲輪をつくるために石垣が多つくられた。

・出入口 城郭では出入口のことを虎口とも呼ぶ。出入りの空間と城門の建物からなり、16世紀以降発達して多様な形態をなすようになる(図2)。図の枡形や馬出しは、仮に敵が最初の門を突破できても、そこには守備側による矢などで攻撃が待っている。このように出入口は敵の人数を制限するだけでなく、攻撃場所に誘い込む役割も担っていた。

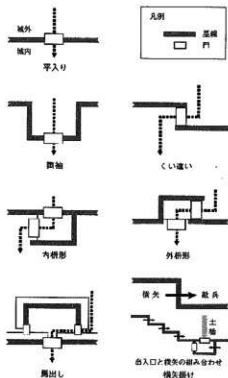


図2 城の出入口の種類(同上)

問い：なぜ山城を築いて籠もるのか？

答え：守備側の悪あがき

兵力とは、兵の数、兵の能力、武器武具の種類と数、さらにはその性能など戦闘に関する総合的な能力である。もしも兵力が相手側より上回っていれば、山城に籠もらず野戦でしっかりと敵軍を撃退できるはずである。兵力が相手側より劣ると事前に想定される場合や、戦闘のさなかに兵力が減少したと分かった時に、山城に籠もることを選択することになる。

山城はその地形を生かして攻撃面を一カ所から数カ所に限定でき、敵をそこに導くことで敵の兵力を減少させられる。守備側が有利な状況を作り出すことで、兵力差をかなり相殺できることになる。長期の籠城は兵糧攻めされると不利になる。つまり短期間しか持たない。

戦国時代には、味方の援軍が到着するまで攻撃に耐えてなんとか持ちこたえるために籠城するのである。仮に援軍が来ない場合には、兵力差は歴然なのですぐに降参する。(江戸時代以降には儒学の影響で簡単に降伏しない)つまり援軍を待つ間の時間稼ぎであり、いわば悪あがきをしているのである。

問い：城はなぜ高い場所につくるのか？

答え：高いと遠くが見え、重力がある。

平地より標高が高い山の上に築城するのは、戦略的戦術的に都合がいいからである。

・見晴らしがよいこと 高い場所は遠くの眺望が良い。つまり敵の動向を知ることができる。『日本書紀』には古代山城での戦闘の記述がある。「壬申の乱」と呼ばれ、672年におこった大友皇子と大海人皇子の皇位継承をめぐる内乱である。この戦闘の記述では「三尾城」（琵琶湖の畔の丘陵に築城か？）と「高安城」（現在の大阪平野と奈良盆地に挟まれた山地に築城）が登場している。三尾城は大海人皇子軍によって一日で攻め落とされたことと記述されているだけで詳細は不明。高安城については、大友軍が高安城に居たが、大海人軍が来襲すると逃げている。その後、大海人軍は高安城から敵軍の動向を把握し、迎撃のため高安城から下って戦ったと記述されている。このように壬申の乱に記された古代の戦闘では、山城は高所からの「敵軍の動向把握」がなされているだけで、主戦場にはなっていない。

戦国時代の城でも同じで、最大のメリットは直直の見張りが配置されていれば、多くの兵は休むことができ、敵の接近が分った時点で完全武装に準備して持ち場に行けば良い。戦闘が開始された場合でも、敵がどの場所に兵を集結させてどこから攻めてこうとしているか、上から見るとわかるので、それに合わせて守備の態勢を整え直すことが可能となる。

・こちらの兵力（兵の数や武器）を敵は分からない 麓に集結した攻撃側からは山の上は見えないし、中腹も巨木や岩陰あるいは石垣の陰の部分は下から見えない。つまり守備側の人数やその配置、さらには武器・武具などの武装が完全武装なのかそれとも身軽なのかもわからない。つまり兵力が把握できない。そのためどこを攻撃してよいか分からないのである。そのため守備側が設定した通路を進み、城門や入り口に向かうことになる。また守備側は遮蔽物の裏に隠れることができるので、ゲリラ的に攻撃することができる。

さらに、攻撃側は低いところから装備を付けて登らねばならず、体力が消耗する。そうすると精神面でもひ弱になる傾向が強い。

・武器は高いところから低いところを狙うのが有利 城に駐屯している守備側は高い位置に居るので、攻撃側が見やすく弓矢を射かけたり、石などを落としたりするのに威力が増すので優位となる。重力により上から射ると威力が強くなる

【※参考：山梨県御坂城 標高1571m（比高差1300m）】

問い：山城に適したよい立地は？ 答え：登るのにフーフーいう地形

・高い方が防御する側に有利だが、高ければよいというものではない。食料や水の確保さらには攻撃側が中腹に陣を張れば、高い位置を占地した効果が半減する。ほどよい高さで、地形が険しい方が相手は疲れる。疲れると、混乱し兵力が乱れることになり、敗走することもある。

・平地の交通路の近くで、丘陵斜面や崖面などの急峻な地形のある立地が望ましい。

進化する与論城

山城は戦乱の時代の産物である。攻めてくるものがあるからその防御のために城を築くのである。与論城も同様である。その年代は台地の平坦部が造成されるのが14世紀前半頃で、その後崖面などの平坦面とその周囲の石垣が整備されるのが14世紀後半から15世紀中頃にかけての時期だということが判明してい

る。この時代に呼応しているのが、琉球で山北、中山、山南の三山の3つの勢力が成立し、抗争を繰り返したころにあたる。

与論城では最初に台地の平場（本丸）を囲んだ石垣のグスクが完成している。その後に、崖面にも石垣を多重に設けるなど縄張りが拡大しており、いわば進化しているのである。グスク社会が進展していく中で、権力争いが激化し、政治の攻防の拠点となるグスクを按司たちは競って強固にしようとした意図が読み取れる。与論城もそのような時代の荒波に飲み込まれないようにした姿ではないだろうか。

とりわけ、崖下の先には海岸がありそこにかつての港が想定されるとすれば、港から多重に積まれた石垣を視認することはできるので、当該からやってくる交易船やそのほかの船に対する軍事的なプレゼンスの役割もあったのではないかと想像する。以上

引用文献

文化庁 2013『発掘調査の手引き』各種遺構編，同成社

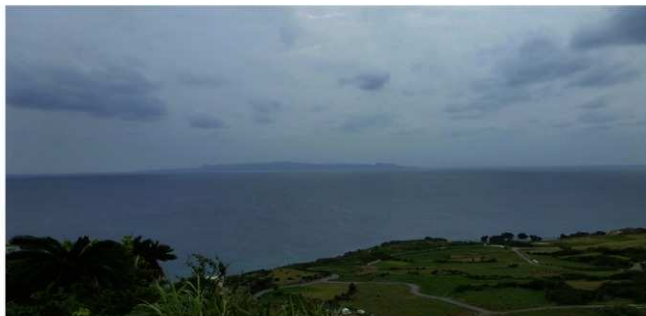


図3 与論城より沖縄本島を望む



図4 南側より与論城崖面を望む

与論城跡の発掘調査成果について

与論町教育委員会 主査（学芸員）南 勇輔

1 与論城跡の概要と調査に至る経緯

(1) 与論城跡の概要

与論城跡は、伝承では琉球国山北王の三男王舅や琉球国第二尚氏王統の尚真王の頃の人物とされる花城真三郎が築城したとされる城郭遺跡（グスク）です。

与論城跡が所在する与論町は、鹿児島県の最南端に位置する与論島にある自治体です。鹿児島県本土（九州島）とは、鹿児島市内（鹿児島城跡）まで約543.8km、鹿児島県本土最南端の佐多岬までは約487.5kmの距離がありますが、周辺の島との距離は、北に位置する沖永良部島の知名までは約32.5km、南に位置する沖縄本島辺戸岬までは約23kmの距離であり、沖縄本島との距離の近さから古くから両島で生活資源の確保のために活発な往来が行われていました。

与論城跡は、島の中でも南側に位置する城集落の西端にあります（図1）。城の範囲は、標高93mの琉球石灰岩の台地の縁から崖下までの比高差70mの急斜面と平坦面を取り込んでいます（図2）。この特徴から、城跡は台地部分（図2の地区1～5）と崖下部分（図2の地区6～14）に分けることができます。

城の中心部分と考えられる神社地（地区1）は、台地の縁の高台にあるため、島の主な港が集中する島の西側一帯や沖縄の島々を一望することができます。

また、城跡の立つ石灰岩の台地は石垣の材料にもなっていますが、この石灰岩は与論島の基礎となる固い岩盤と城の崖下で接しています。この境からは水が湧き出するため、古くから地域の水源として利用されてきました。このような井戸や湧き水は城の水源として利用されていた可能性があります。

(2) 現在の状況

与論城跡の行政的な文化財としての保護は、昭和51年2月20日に神社地（地区1）周辺を「城跡（しろあと）」として町の史跡に指定したことが始まりです。また、神社地（地区1）とその隣接する平場（地区2）は、国指定重要無形民俗文化財「与論の十五夜踊」の奉納・演舞の会場としても利用されています。

この内、台地部分（図2の地区1～5）は、幕末から明治の初めにかけて勧請された神社や公園地、周辺集落住民の耕作地、墓地として利用されています。加えて、眺めの良さから島内有数の観光地としても利用されています。昭和から平成の初めにかけて行われた公園整備などにより、盛土や石垣の撤去・津見直しが行われていますが、石垣の基礎の輪郭から元々の区画を伺うことができます。

また、崖下部分（図2の地区6～14）は、崖の間の平坦面が昭和30～40年代まで畑や、集落と崖下



図1 与論城跡の位置（背景画像は国土地理院地図を使用、改変）

をつなぐ生活道路として利用されていました。大規模な工事が行われなかったため、台地部分に比べて改変が少なく、石垣の残りも良いです。加えて、崖下には周辺の集落住民が近世から近代にかけて利用していた墓地（風葬墓）があり、現在でも関係者が管理しているものが多いことも特徴です。

2 調査の経過と成果

(1) 現在までの調査の歴史

与論城跡では、平成5年（1993）に実施された遺跡内容確認のための発掘調査以降、与論町教育委員会によってこれまでに27か所で発掘調査が行われています。与論城跡は、近代以降の神社地や墓地、畑地、公園としての整備により、石垣の組み換えや積み直し、盛土造成工事が行われるとともに、雑木の繁茂によって石垣の位置や平坦面の状況も把握が困難な状況となっていました。そのため、与論城跡の内容・範囲確認を目的として測量・発掘調査を令和元年度から令和4年度にかけて実施しました。

(2) 与論城跡の変遷過程とそれぞれの発掘調査成果

測量調査の成果

与論城跡は、令和元年度に周辺部を含めた城域全体の三次元地形測量調査と石垣の平面・立面図の作成を行いました（図2）。調査の結果、石垣の配置や断層崖地形を取り込んだ区画配置の状況を把握することができました。また、石垣の図化により、沖縄のグスクにみられる張り出しを持つような屈曲した平面形や、地形を利用した野面積みによる石垣の構築方法や、石垣の高さが2m以上になる場合は段を設けることで高層化を図る特徴が確認されました（図3）。

発掘調査の成果

与論城跡は、平成5年度と令和2年度から令和4年度にかけて発掘調査を実施しました。発掘調査で確認された遺構や遺物、歴史的な動向を基にⅠ期からⅥ期に時期区分できます（図5）。

与論城跡Ⅰ期（12世紀～13世紀後半）は、与論城跡の中で人の利用が確認できる最初期で奄美・沖縄域に大きな社会変動が生じ、沖縄史で「グスク時代」に移る時期に相当します。この時期は、発掘調査で得られた出土遺物量が少なく、遺構も柱穴跡が周辺部（トレンチ21・22・24）で確認された程度であることから、集落遺跡の一部だったと考えられます。

与論城跡Ⅱ期（14世紀前半～中頃）になると、遺物の出土量が増加し、台地部分の地区2（土

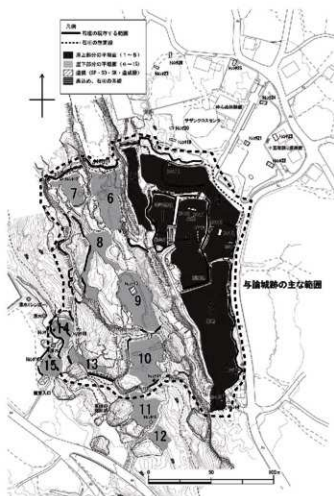


図2 与論城跡の地区区分と主な調査箇所

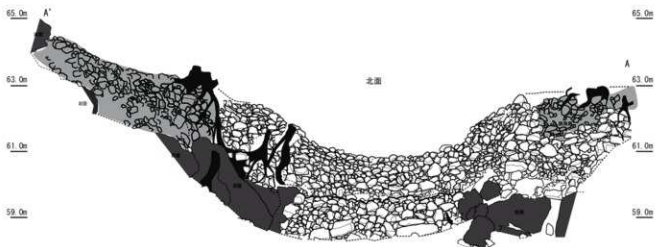


図3 地区7の石垣の立面図（北面）

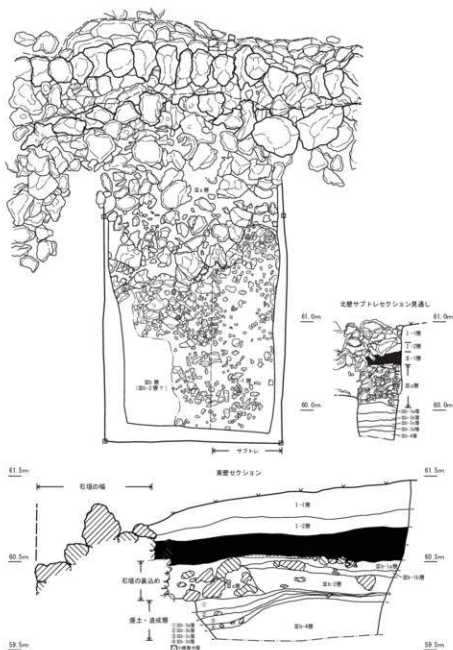


図4 地区7の石垣の構築状況

依のある広場)を中心に造成が始まりますが、沖縄本島でも石積みで囲まれたグスクの構築が始まることから、沖縄本島側の社会変動に連動した動向と考えられます。また、地区2のトレンチ3の発掘調査では、岩盤を埋めて造成を行っている状況が確認されましたが、造成後の生活層からは岩盤を埋める造成層から出土したヨロンジママイマイやシュリママイマイが確認できないことから、築城行為により自然環境(森林)が変化した可能性が確認されました(黒住 2024)。

与論城跡Ⅲ期(14世紀後半～15世紀中頃)は、崖下部分の造成や石垣構築、建物構築が行われ、現在の域域が整備された時期と考えられます。地区7の石垣4の発掘調査や地区10のトレンチ14の調査では、裏込めを用いる石垣の構築方法と、盛土による平坦面造成の状況が把握されました。また、地区9のトレンチ13の発掘調査では、整地面とともに複数の柱穴跡が確認され、建物が建てられていたことが把握されました。加えて遺物の種類・量ともに多く、中国産の多様な陶磁器類や、日本の備前焼、ガラス製品、多様な石製品、鉄製品、素文鏡、羽口などが出土しており、利用が最も盛んであったと考えられます。

また、発掘調査で確認された、築城のための大規模な土木工事や動物骨や魚介類の地区ごとの出方の違いは、沖縄本島北部や奄美群島内では山北王の居城であった今帰仁グスクと似た状況が確認されています。当時の与論島を取り巻く歴史的状況については(図6)、王舅が来島したとされる14世紀後半から15世紀前半の沖縄は、山北・中山・山南の各勢力が元を退けて中国を統一した明に相次いで、勢力を競った三山時代にあたります。この頃、日と明の貿易航路が南北朝の動乱と前期倭寇の影響によって、それまでの西北九州沿岸を経由するルートから、沖縄を経由する南洋路の利用が盛んとなります。加えて、この頃に明が行っていた冊封貿易(冊封を行った特定の国とのみ正式な貿易を行うこと)では、琉球の国々が他の国々に比

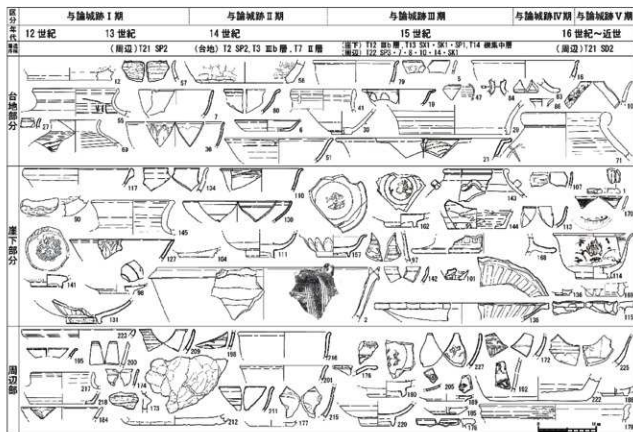


図5 与論城跡からの主な出土遺物

べて優遇されていたことから、琉球と明、日本と琉球の間の貿易が盛んになります。この中で奄美群島は、15世紀中頃に作成された絵図（『海東諸国紀』や『琉球国図』）で朝鮮から日本（九州）を經由して琉球に至るまでに經由する島々として記載されています。加えて三山の各勢力が明への重要な輸出品であった硫黄が、奄美群島の西側に位置する硫黄島島が主な産地と考えられているなど、当時の東シナ海を跨ぐ交易航路や貿易品の確保の上でも重要な地域であったと考えられます。

山北王の三男が築城したとする伝承、当時の歴史的な背景を踏まえると、山北の勢力が奄美群島方面へ進出する足掛かりとして人員を派遣して城跡を整備した可能性が考えられます。

一方で、城域は断崖や崖下の大型の石垣が見える西側から南側に対する防御意識が伺えます。この方向は、今帰仁グスクが位置する本部半島方面であり、沖縄側に対する意識も考えられるが、島の主な港も望めることから、沖縄本島北部地域や周辺海域に対する警戒の意識もあったと想定されます。

与論城跡Ⅳ期（15世紀後半～16世紀）は、尚巴志による琉球国の統一過程で山北が滅亡し、琉球国の統治下におかれる時期で、花城真三郎が来島したと伝わる時期にあたりますが、遺構は確認されておらず、急激に遺物量が減少することから城内の利用は低調になったと考えられます。城跡の機能・役割が変化した可能性があります。

与論城跡Ⅴ期（17世紀～18世紀）は、薩摩藩統治下の時期にあたり、発掘調査時の表土層や旧表土層は当該期の耕作等の利用によって形成されたもので、周辺部では耕作に伴う溝跡（トレンチ21）や畑の区画の石垣が構築されています（トレンチ19・20・26・27）。この頃、与論城跡の東側（現在の城集落）には、当時、島を治めた地元の役人層（主に花城真三郎の子孫）や薩摩藩の代官の一族が集住して島の中心地として栄えました。

また、鹿児島本土はいわゆる外城制によって、外城となった城は江戸期を通じて維持、管理されていたことが、文献史学・考古学双方の調査から明らかになっています。しかし、与論城跡については、町内に残存する古文書では維持管理を行っていた様子は伺えず、伝承や明治11年の土地台帳から、畑や茅場、糸芭蕉栽培地（バシャヤマ）、墓地として利用され、城内の道は生活道として利用されていました。しかし、城跡に関する伝承が伝わることから、城跡であった意識は残されていたと考えられます。

この時期の陶磁器類の産地は、沖縄産を中心に本土産（主に薩摩や肥前）、中国産など多様であり、近

関連年表（西暦表記）



図6 与論城跡に関わる主な歴史的な出来事

世日本と琉球の境界に位置する与論島の状況を示していると考えられます。

以上のことから、与論城跡の考古学的特徴や形態、伝承は沖縄本島との繋がりが、特に山北との関係を伺わせず。一方で、琉球国が奄美群島北部へ侵攻した15世紀中頃以降は城跡の利用が低調となることから、時代によって城跡の役割に変化が生じたと考えられます。

3 文化財としての価値

(1) 構造的特徴

与論島は奄美群島最南端で、与論城跡は島内でも南側の沖縄本島を望む台地の縁辺部の高まりから断層崖下にかけての地形を利用して築城されています(図2)。

城域は石垣や断崖、巨大な転石とその間の平坦面によって構成されており、城跡の外郭となる範囲は石垣の基礎や裏込めが確認された台地部分の地区3・4・5の外郭となる石垣と、城跡に係わる遺構が確認されなかった崖下部分の地区12・15を除く地区の石垣や転石、崖の斜面によって連なる範囲と考えられます(図2中の黒点線の範囲)。サザンクロスセンターがある石垣の外側については、与論城跡と同時代の遺物、遺構が確認されていますが、城跡に伴うような石垣などは確認されなかったことから、城域に付属する集落遺跡などと考えられます。

各地区の構造的な特徴としては、台地部分が神社地となっている地区1を中心に沖縄の大型グスクにみられるような中心性を有する区画の配置が認められる他、石垣は外郭となる石垣は外面側の面が揃うように積む特徴があります。また、石垣の平面形が張り出しを持ちゆるやかに屈曲する点や、石垣を構築する際の技法など、沖縄のグスクの構造や技術がみられます。

崖下部分についても、外郭の石垣の構築方法は台地部分と同様ですが、内部の区画は台地部分のように明確な石垣が認められず、地形の高低差を活かした地区分けが行われています。また、崖下の入口と考えられる地区14・15から地区8にかけての道沿いには、張り出し状の石垣が連続で配置されており、この石垣配置は他のグスクでは類例が無いことが指摘されています(山本2015)。

このように、与論城跡は台地の縁辺部から断層崖下までを取り込んで石垣の配置や平場の造成を行って城域の整備を行っています。この台地上から崖下までを城域に含む構造は、沖縄のグスクでは類例が少ないことも指摘されています(山本2015)。

発掘調査の結果、城郭は14世紀代から整備され、14世紀末から15世紀中頃を最盛期とし、石垣を防御施設の中心とした沖縄の影響のもと築造されたグスクであることが確認されました。特に、沖縄の大型グスクにみられる構造を持つ台地部分は14世紀代の整備と考えられるのに対して、崖下部分は14世紀後半～15世紀中頃の整備と考えられるため、構造の違いは時代や築城主体が異なる可能性が考えられます。

奄美群島の城郭遺跡は、徳之島以北は日本本土の城郭遺跡のような土づくりの構造をしており、規模も与論城跡に匹敵する城跡は確認されていません。また、同じグスク系の城郭遺跡の北限とされる沖永良島島の後蘭孫八城跡ごらんまごほちでは石垣が多用されていますが、大型のグスクにみられる中心性を持った区画配置が認められません。沖縄本島北部についても、今帰仁グスクを除いて奄美群島北部のような土づくりを中心とした構造となっています。

このことから、与論城跡の構造は沖縄本島北部に分布する石積みを有する大型グスク(今帰仁グスクか)の影響を受けたと考えられます。また、大型グスクの北限でもあり(図7)、数次にわたる造成の過程が明確となった奄美群島唯一の城跡とも言えます。

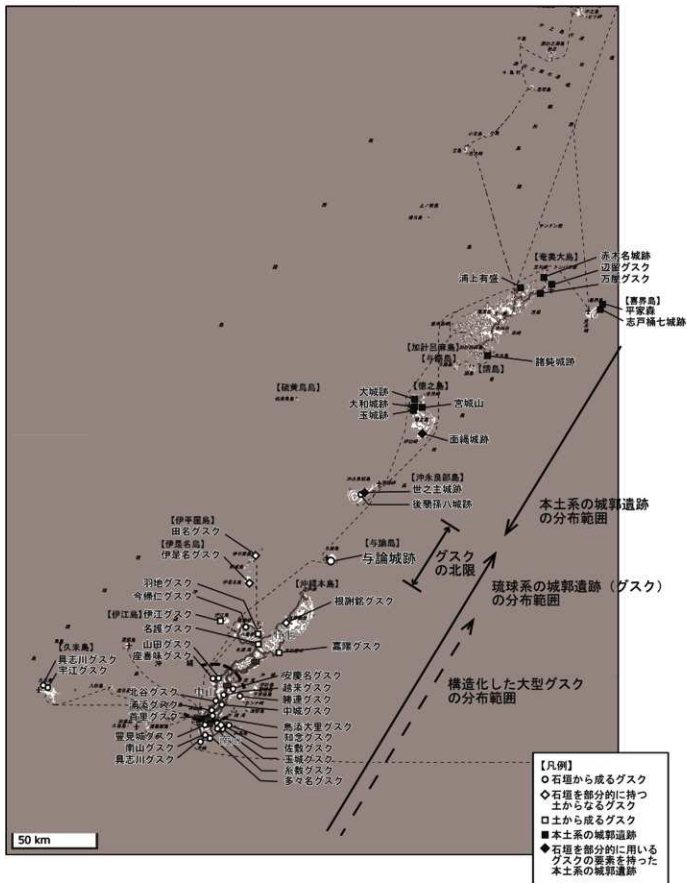


図7 与論城跡と奄美・沖縄の主な城郭遺跡 (背景画像は国土地理院地図を使用、改変)

(2) 歴史的評価

与論島を含む奄美群島は、沖縄や日本本土との歴史・文化の境界に位置しており、双方の影響を受けつつ独自の地域文化と歴史の歩みを持つ地域です。与論城跡は14世紀頃に台地部分の築城が始まり、14世紀後半から15世紀中頃にかけて崖下部分の城域の整備が行われ城内の利用も最盛期を迎えますが、以後の時期は利用が低調になります。与論城跡の整備が始まるⅡ期は、沖縄においてもグスクの整備が始まる時期に当たることから、沖縄側からの影響が考えられます。最盛期を迎えるⅢ期は、明による東シナ海域の秩序の再編が起り、日本本土では島津氏など九州島の勢力が交易などを通じて南へ勢力を伸ばすとともに、沖縄本島では三山の各勢力が競い合う三山時代から、尚巴志による三山統一が行われた時期にあたります。与論城跡の城主として山北王の三男とされる王舅が派遣されたと伝わることも、この時期に山北の勢力が奄美群島南部まで進出しようとしていたことが背景として考えられます。

このことから、与論島を含む奄美地域は中国、日本、沖縄の動向に対応しなくてはならない政治的緊張の高い地域であったと考えられ、このような歴史的な背景の中で与論城跡の整備や利用が最盛期を迎えたと考えられます。利用状況が急激に低下するⅣ期は、尚巴志による三山統一の過程で山北が滅亡し、その後は第一尚・第二尚氏王統ともに奄美大島や喜界島へ進出を強め、更にはトカラ列島をめぐって鹿児島島の勢力と争うようになることから、琉球国の進出先が奄美群島北部以北へ移ったことで役割も変化していったと考えられます。

このように、与論城跡の発掘調査成果から伺える城域の利用・変遷は、沖縄側のグスクの動向とも連動しつつ、境界領域の城郭として東シナ海域の歴史的な状況の変化に連動した城郭であったと考えられます。

引用 HP

国土地理院地図電子国土 web <https://maps.gsi.go.jp/>

引用文献

黒住耐二 2024 「貝類遺体」『与論城跡 - 町内遺跡発掘調査事業に伴う与論城跡発掘調査報告書 -』

与論町教育委員会

山本正昭 2015 「与論グスク概観」『しまてい』No.73, 建築情報誌しまてい編集委員会

与論町教育委員会 2024 『与論城跡 - 町内遺跡発掘調査事業に伴う与論城跡発掘調査報告書 -』

与論町教育委員会

古代・中世の奄美・与論

ラ・サール学園 非常勤講師 永山 修一

1 ヤクとリュウキュウとアマミ

『隋書』の流求伝によれば、隋の皇帝煬帝は、大業元年(607)と翌年に武官の朱寛を流求に派遣してその服属を試みたが、ともに失敗した。遣隋使小野妹子らは、朱寛が持ち帰った戦利品の布甲(一種の甲)を見て「これは夷邪久国人が用いるものである。」といった。隋側からのリュウキュウとヤマト側からのヤクは、同じような地域を指す可能性があり、ヤクの情報が、ヤマト(倭)政権中枢に届いていたことがわかる。

平安時代の辞書『和名類聚抄』は、夜久貝(ヤコウガイの古名)を西海の益救島で産出するとしており、このヤク島は、現在の屋久島の個別島名ではなく、南の島々の集合名称であったようだ。

『日本書紀』には推古二十四年(616)と同二十八年(620)に、ヤク(掖玖・夜勾)人が帰化したなどの記事があり、さらに舒明元年(629)四月、田部連が掖玖に派遣され、翌年九月に帰還したとする。

白雉四年(653)に2隻かなる遣唐使が派遣されたが、その第2船は薩摩の曲と竹島の間で遭難しており、この第2船は南島路をとって唐に向かう予定だったらしい。

はくち白雉五年(654)四月に吐火羅国・舎衛の計4人が日向に、斉明三年(657)七月にとから親貨運国の男女6人が海見島を経て筑紫に漂着した。吐火羅国・親貨運国は、各ドヴァアラヴァティ王国(タイのメナム河下流域)、シュラーヴァスティ(ガンジス河中流)とする説がある。これはアマミの初見となる。

2 南島人の朝貢

天武六年(677)二月、政府は多禰島の人らを飛鳥寺の西にある槻(ケヤキ)のたつ広場で饗した。同八年(679)十一月、政府は倭馬飼部造連らを多禰島に派遣した。同十年(681)八月に、使節は多禰島人を伴って帰還し、多禰国図と多禰島情報をもたらした。九月に多禰島人は飛鳥寺の西の河辺で饗をうけた。同十一年七月に、多禰人・掖玖人・阿麻彌人が禄を与えられ、同じ頃、南九州の隼人も朝した。多禰人・掖玖人はそれぞれ種子島、屋久島の人と考えられ、阿麻彌人は奄美大島の人であったと考えられる。

文武二年(698)四月、政府は文忌寸博士ら8人に武器を持たせて南島に派遣し、「国を覓」めさせた。これは、未知の国を探し求めることであり、「南島」という語の初見記事となる。

翌年七月、多禰・夜久・奄美・度感等の人が朝貢を行い、度感島はこの時はじめて「中国」に通じた。度感島は徳之島のことで、「中国」は世界の中心にある国の意味で、ヤマト政権も自らの政権が周辺に住む夷狄に従える存在であるという認識(日本版華夷思想)を持ち、このような表現を用いたのである。

大宝二年(702)八月、政府は薩摩・多禰の「反乱」を征討し、戸籍造りと役人の任命に着手した。種子島・屋久島は国に準じる多禰嶋に編成され、南島の北端に国郡制が及ぶことになった。

慶雲四年(707)七月には南島人が朝貢し、大宰府で叙位と賜物が行われた。和銅七年(714)十二月、太遠建治らが奄美・信覚・球美など南島人52人を都に引率し、大極殿で行われた翌年正月元日の儀式では、陸奥・出羽の蝦夷とともに奄美などの南島人が方物を買いだ。信覚は石垣島、球美は久米島とされ、与論島も政府の視野に入っていた可能性が高い。

養老四年(720)十一月に232人、神亀四年(727)十一月に132人の南島人が叙位された。これらは朝貢に対応する叙位であり、この叙位が都・大宰府のいずれで行われたのか不明である。神亀四年(727)の朝貢以降、政府が編纂した歴史書には南島人の朝貢・交易に関する記事は確認できなくなる。しかし、

福岡県大宰府市の大宰府不^{ふらふら}地区から「奄美嶋」「伊藍嶋竹五」の貢進物付札木簡が出土しており、これらは、天平年間（729～49）に、大宰府が南島から集めた品々につけたもので、品々を都に送った後、不要になって溝に投棄されたもので、「奄美嶋」は奄美大島、「伊藍嶋」は沖永良部島あるいは与論島とされる。10世紀にまとめられた『延喜式』にも南島産品に関する規定が見えるから、神亀四年（727）以降も南島との交易が続いていたことは確実である。

3 遣唐使南島路

南島は、遣唐使の航路上にあったため、遣唐使に関する史料の中に南島の姿を見ることができる。遣唐使は全部で18回の派遣が実施あるいは計画されたが（森公章2010）、このうち第2次（653年派遣）、第9次（733年派遣）、第11次（752年派遣）、第17次（838年派遣）は、ほぼ確実に南島路を利用している。

『唐大和上東征伝』（鑑真の伝記）によれば、鑑真が乗船していた第11次遣唐使の第4船は、唐暦天寶十二年（753）十一月唐の黄泗浦を出帆し、阿児奈波島（沖縄本島）か、益救島を経由して、十二月薩摩国阿多郡秋妻屋浦（南さつま市坊津町秋目）に到着した。

帰着した船からの情報により、政府は、帰還支援策を採った。すでに天平七年（735）に南島路をとって帰国した第9次遣唐使の情報により、大宰府に命じて、到着した島の名や水が得られる場所など、帰還に有益な情報を記させた牌を南島にたてさせていたが、これらが朽ちていたため、政府は大宰府に命じて、牌を元通りに修理させた。大宰府が南の島々に関するかなり詳細な情報を持っていたことがわかる。『延喜式』雑式にも、牌の規定があり、また、『延喜式』大蔵省入諸蕃使条によれば、遣唐使には新羅語と奄美語の訳語（通訳）が同乗することになっており、航路を北に外れた場合は新羅に、南に外れた場合は奄美に漂着する可能性が想定されていた。

4 多機嶋の停廃と喜界島城久遺跡群

8世紀初頭に設置された多機嶋は、①律令国家の版図拡大、②南九州の隼人支配の円滑化、③南島人の朝貢支援、④遣唐使の航路支援などを期待され、大宰府からの財政支援のもとに維持されていた。8世紀後半以降その存在意義は大きく減じることになり、さらに9世紀前期に、大宰府管内で度重なった飢饉や疫病により大宰府の財政難が深刻化し、政府は天長元年（824）に多機嶋を廃止し、大隅国に併合した。

多機嶋の廃止後の、南島の状況について、2003～2009年に調査された喜界島（大島郡喜界町。以下、喜界町喜界島と呼ぶ）の城久遺跡群は重要な情報を提供してくれている。面積約130000㎡におよぶこの遺跡群は、大きくⅠ期（9世紀～11世紀前半）・Ⅱ期（11世紀後半～12世紀）・Ⅲ期（13世紀～15世紀）の3期に分けられる。Ⅰ期では、遺構は確認されていないが、越州窯系青磁（9世紀中葉の物を含む）や初期高麗青磁、東美濃産灰釉陶器など少量ながら高級品が多く、大宰府との関係を強く示唆する遺物が出土し、出土遺物の70%は島外からの搬入品が占めていることから、多機嶋停廃後、大宰府は南島経営の拠点を喜界町喜界島に移したのではないかという説が示されている（亀井明德2006）。

5 南島の交易品

南島の主要な産品は、赤木・檳榔・ヤコウガイ（夜久貝）であってであった（山里純一 2012）。

赤木は、親王日記、経巻の軸や和琴などに用いられ、『延喜式』内蔵寮諸国供進条には大宰府が進上するものとして赤木 20 村があり、同じく民部省下年料別貢雑物条によれば赤木は南島の進める物であった。

檳榔は、渤海王へ檳榔扇 10 枚を贈った例があり、10 世紀の踐祚大嘗祭の百子帳（天皇のみそぎ禊に用いる仮屋）の屋根は檳榔で葺くことになっていた。牛車の車箱の表面を檳榔の葉で飾った檳榔毛車は、天皇・太上天皇及び四位以上の者しか乗ることができなかった。

奄美市小湊フワガネク遺跡では、6～7 世紀のヤコウガイ貝匙の加工過程が確認されている。完成品のほとんどは交易品として島外に運び出された可能性が高い（高梨修 2005）。

正倉院には、ヤコウガイを用いた鏡・琵琶・琴・箱などが伝来している（荒川浩和 1998）。漆芸の研究によれば、10 世紀と 11 世紀の交に新たに平塵地螺鈿・時絵螺鈿の技法が登場しており（中里壽克 1995・1996）、これは必然的に螺鈿の材料としてのヤコウガイの需要を増大させた。なお、平安京左京五条三坊七町跡・鳥丸綾小路遺跡では、ヤコウガイの螺鈿を製作する際に不要となった部分を廃棄した 11～12 世紀の土坑が検出されている（イビソク関西支社 2017）。

6 キカイガシマと南島の転換

南島との交易の活発化は、交易上のトラブルも引き起こしていったようだ。長徳三年（997）には南蛮人の管内諸国襲撃事件が起こった。公卿たちは、要害の警備、追討命令、仏神への祈祷という善後策を決定し、翌年大宰府は、南蛮の捕進を貴覧島に下知し、さらにその翌年、大宰府が、南蛮の賊を追討したことを政府に報告した。下知対象のキカイガシマと、征討対象の奄美は区別されており、キカイガシマには、下知を実行に移した大宰府の出先機関が存在したか、あるいは大宰府の官人が滞在していたと考えられる。城久遺跡群のⅠ期の出土品からして、キカイガシマが喜界町喜界島であった可能性は高いと考えられる。寛仁四年（1020）にも天喜二年（1054）前後にも、南蛮襲来事件が起こっていたと考えられる（永山修一 2007）。

この時期の南島交易の活発化について、11 世紀の『新猿楽記』によれば、商人の首領である八郎真人は、東は浮囚之地から西は貴賀之島までを活動範囲とした。また『小右記』によれば、薩摩・大隅の関係者から南島産品がたびたび右大臣藤原実資のもとに進上された。南海の島々は、王朝貴族が珍重する品々を産出することから、「貴」のイメージで認識されており、「キカイガシマ」は個別島名としてばかりでなく、多くの島々の集合名称としても用いられるようになった（永山修一 1993）。

11 世紀代には考古学的な面でも南島に大きな変化が生まれている。第 1 に、南島では 11 世紀までに長崎の西彼半島などでつくられた縦耳型の滑石製石鍋が流入した。また石鍋の破片は、石鍋模倣土器や滑石混入土器の材料として持ち込まれた可能性が指摘されている。

第 2 に、玉縁口縁白磁碗（大宰府分類白磁Ⅳ類）・初期高麗青磁などの輸入陶磁器が大量に流入し始めた。

第 3 に、徳之島でカムイヤキの生産が始まった。カムイヤキは、長崎県大村市の竹松遺跡から沖縄県の波照間島に分布する中世四大広域流通陶器の一つで、その製作技術は高麗無釉陶器と関係が深いとされている。

第 4 に、喜界島の城久遺跡群ではⅡ期の最盛期を迎える。遺跡群の最も高所に当たる地点では、倉庫を伴う大型の四面廂付掘立柱建物が検出されている。また、この時期の琉球、奄美地域で広く認められる

玉縁口縁白磁碗や滑石製石鍋、カムイヤキなどが多量に出土し、この地域では唯一の製鉄炉が検出されるなど、琉球、奄美地域における一大交易圏の中心となった（松原信之他 2015）。

こうした南島の転換は、北部九州ひいては東アジア全体の動きと連関していた。大宰府における貿易陶磁は11世紀中頃に画期があるとされ、貿易の中心地は鴻臚館（外交・海外交易の施設）から宋人居留地が営まれた博多遺跡群に移って、いわゆる住蕃貿易が開始された。

滑石製石鍋生産の契機の一つとして中国文化の流入、中国商人の生活・風習と関わりが想定され、石鍋の流通に「宋商人」が介在し（松尾秀昭 2017）、またカムイヤキの製作技術の流入にも、北部九州の勢力や「宋商人」などを想定できる。宋人たちの活動が活発になり、南島交易にも積極的に参入してきたようだ。

カムイヤキについて、南島交易の対価とされたという説に対して、はじめから九州島以北から南島に移住してきた人々に対する供給を目的として生産されたとする説もある（池田榮史 2019）。また、ヒトのミトコンドリア DNA の研究によれば、中世以降に南九州の農耕民が喜界島や徳之島など奄美諸島に移住し、さらにそこから琉球へ移住して、琉球に農耕が導入されたという可能性も指摘されている（篠田謙一 2018）。

7 キカイガシマとイオウガシマ

10世紀以降唐王朝の崩壊から五代十国の分裂、宋王朝による中国の再統一の過程で、火薬の武器への転用が進められ、その原料である硫黄の需要が高まった。支配領域で需要をまかなえない宋王朝は、10世紀末頃、日本列島産硫黄に注目した。1080年代に西夏と戦っていた宋王朝は、1084年5つの綱（商人集団）を日本に派遣して、各10万斤、計50万斤（約300t）のイオウを調達した（山内晋次 2009）。このころから、イオウを産出し積み出し容易な薩摩硫黄島（三島村）が注目され、イオウガシマは南島を代表する島名となり、多くの島々の集合名称としても用いられるようになった。

天永二年（1111）に紀伊国に到着した「喜界島の者」への対応は、「宋人定」に準ずる陣定で検討された。キカイガシマは、日本の外側に位置付けられるようになっていく。また、12世紀の末ごろにキカイガシマの「キ」音の表記が、「貴」「喜」から「鬼」へと変化しており、都人たちの南島観の変化を示している。

8 鎌倉幕府と奄美

文治元年（1185）に平家が壇ノ浦で滅ぶと、源頼朝とその弟義経との対立が深まり、文治三年（1187）頼朝は、宇都宮信房と鎮西奉行天野遠景に義経の与党が隠れているとされた「貴海島」の追討を命じ、翌年これを平定した。このキカイガシマは喜界町喜界島の可能性が高い。

このあと、頼朝は十二島地頭職を設置した。『平家物語』によれば、集合名称としてのキカイガシマは、口五島と奥七島からなり、薩摩国河辺郡とされた。口五島は鹿児島県の三島村に、奥七島は鹿児島県十島村に比定されている。尾張国愛智郡千電郷を本領とする御家人で得宗被官でもあった千電時家の嘉元四年（1306）四月十四日付謙状には、子女に譲られた所領として口五島・わさの島・喜界島・大島・永良部島・七島・徳之島・屋久島下郡が見える。また得宗家の周辺で作成された14世紀初頭に描かれた金沢文庫蔵『日本図』の中には、「龍及国」「雨見島」が見える。

このころ、琉球では国家形成の動きが本格化し、南の島々間の交通が活発になっていった。伝説的な記事ながら、琉球王国の歴史書『中山鑑』などには英祖王の咸淳二年（1266）に「北夷大島、重訳来朝ス」とあって、沖縄島と奄美諸島との関係の深まりをうかがわせる記事がある。

9 室町幕府と琉球王国と奄美諸島

島津氏が保持していた十二島地頭職については、文永二年(1265)、文保二年(1318)、元徳三年(1331)の譲状や、延文元年(1356)の足利義詮安堵下文などで確認できる。貞治三年(1364)の島津氏所領注文には「同国河辺郡、同十八島」、同年四月十日付の島津道鑑(貞久)の譲状(師久宛)には、「薩摩国河邊郡【同拾貳島此外五島】」と記されており、14世紀後半に入ると従来の十二島に加えて五島あるいは六島が島津氏の権益の存在する地域として認識されるに至った。五島あるいは六島は奄美諸島のことであり、島津氏もまた奄美諸島における交易に関わり、南九州の在地領主たちも多く関わっていた可能性が高い。

1368年、中国では朱元璋が明を建国し、新たな国際秩序の建設を図るべく周辺諸国に朝貢を求めた。琉球では、1372年に中山王察度、1380年に山南王承察度、1383年に山北王帕尼芝が明に朝貢を開始した。日本では、1392年に南北朝を合一させた室町幕府3代将軍足利義満が、1401年明に朝貢を開始し、明を中心とする国際秩序に加わった。通説では、1429年中山が山北と山南を滅ぼして琉球を統一したとされる。中山が山北を併せるまで、奄美諸島の一部は山北の影響下にあった可能性が高い。嘉永三年(1850)にまとめられた『世之主かなし由緒書』によれば、沖永良部島の世の主は、北山王の二男であり、中山王の娘と婚姻関係を結んでいたが、三山統一後まもなく自害したとされ、沖永良部島は中山王の支配下に入ったという。

伝承ではあるが、与論島の城集落について、「北山の帕尼芝王の三男勇が渡島して、樋口の高所に築城をなし、与論島の豪族の娘と結婚したとされている(野口才蔵1976に見える林清国・麗桓茂阿氏からの聞き取り)。

琉球王国は1441～46年に大島征討を完了し、大島北部の笠利に笠利大屋子を派遣した。琉球王国の奄美諸島への勢力拡大は、すでにこの地域に権益を持っていた九州以北や在地の勢力との対立をきびしいものにしていった。『朝鮮王朝実録』端宗元年(1453)五月丁卯条によれば、1450年トカラ列島の臥蛇島に漂着した4人の朝鮮人のうち2人は薩摩に、2人は喜界島征討中の琉球王の弟が滞在していた大島の笠利に連れて行かれて、琉球人が買い取り、琉球王に進上された。この4人は、奴隷として売買されており、倭寇によって掠奪された「被虜人」の売買もさかに行われていた(真栄平房昭2001)

3年後、琉球国王は、琉球・朝鮮と関わりの深い博多商人道安に託してこの2人を朝鮮に帰国させた。道安は、近年琉球国と薩摩は和睦せず、擄掠が行われていることを述べ、朝鮮に博多～薩摩～琉球の地図を進上した。これをもとにした地図が1471年に朝鮮王朝が作成した『海東諸国記』に収められている。これには、琉球から奄美海域の島々が詳細に描き込まれ、また航路も描かれている。

「基家系図」によれば、又吉大主の子花城真三郎が21歳の時首里より与論島に渡って花城與論主となり、その子殿内與論主が真三郎の遺跡を相続したと伝えている。これがいつのことか明らかではないが、又吉大主は尚真王(在位1477～1526)の時代の人とされているので、おおよそ16世紀に入ってからのことと考えられる。

おわりに

与論城は、14世紀後半～15世紀中頃を主体とする城郭遺跡である。こうした城郭を必要とする状況はどのようなものだったのだろうか。すでに述べておいたように、14世紀半ばには、島津氏など九州の勢力が奄美諸島まで力を伸ばし、一方、与論城の王舅伝承にあるように山北の勢力は与論への勢力拡大をおこなった。その後、山北は中山に合わされることになり、与論も中山の勢力下に入ったと考えられる。

15世紀中頃以降の与論島をとりまく状況を見ていこう。

琉球王国は、奄美大島征討に引き続き喜界島征討を進めたが、頑強な抵抗にあった。『中山世鑑』などによれば、1466年に国王自らが遠征して喜界島征討を完了させた。『琉球国由来記』によれば、その1466年に泊里主が任命され「大島・徳島・鬼界島・与論島・永良部の年貢等を掌」った。また琉球国頭・奄美諸島・九州方面の船の年貢等を掌る泊御殿という役所もつくり、また大島倉（大島御蔵）という奄美諸島の貢税・物資の収蔵庫もあった。

『朝鮮王朝実録』によれば、1493年ころ、日本の甲兵が奄美大島を奪還するために襲来し、琉球側はこれを撃退したとされる。『おもろさうし』第1の「おきやかもい（尚真王）」が「かさり（大島の笠利）」を討つおもろは、1493年の交戦に関わる可能性もある。『屋宮家自家正統系図』によれば、嘉靖年間（1522～1567）に大島東間切諸鈍村の伊喜與保比屋と與牟知喜與兄弟は「一島の土貢を横領し」たため、金武按司と摩文仁親方に追討させ、その後も摩文仁親方は処々に蜂起した「大島残徒」を10年かけて掃討したという。『師玉系図』では嘉靖年間、金武按司と摩文仁親方に、貢物を掠奪した焼内間切の名柄八丸らを追討させたという。

『中山世鑑』によれば、琉球王国支配のもと大島には数名の「酋長」がいたが、その中に対立が生じ、他の「酋長」たちが与湾大親の謀反の企てを讒言したので、1537年に王府は軍を派遣して与湾大親を討った。『球陽』尚元王十六年（1572）条には、与湾大親亡き後、大島の同僚が謀反し貢を絶ったため、王親ら船50余艘を率い征討し、別の「酋長」を立てたとあり、与湾大親を討った後も、琉球王国による大島支配が安定しなかったことを伝えている。

国頭より与論・永良部島を掌る「おくと奥渡より上のさぶり（自奥渡上扱理・自奥渡上設理）」職が置かれ、『琉球国由来記』によれば、1539年にもう毛氏保栄茂親雲上盛実が、これに任命された。なお、『中山世鑑』や「すゑつき御門のみなみのひのもん」「添継御門北之碑文」などによれば、尚清王が命じた首里城の添継門の石垣普請には、「自奥渡上」の人々も動員され、1546年に竣工した。

さらに、18世紀半ばに成立した『遺老説伝』第3巻には、以下のような、王による与論・永良部出兵に従軍した喜屋武間切東辺名村の武勇抜群の者の話がある（前村佳幸 2024）。

一、喜屋武間切東辺名村の奥間里之子、武勇群を出づ。時の王、兵を与論・永良部二島に加う。奥間も亦た師に従いて行く。行に臨まんとせし時、正に其の妻子を生み射弓の日に当り、因りて慶宴を設く。俗語に之さきを宇波慶と謂う。父奥間其の宴に食して起程す。攻取せし時に奥間尖に出て奮勇す。早くも暗箭眉間に射中するを被り、便ち其の箭を抜くや、箭鉄折れて頭内に在り。奥間転じて気力を加え、勳勝して帰る。家に到り医に請いて箭鉄を取出すも、傷重く遂に死す。其れ子孫に遺命し、宇波慶の飯を食すること勿らしむ。其の裔孫は今に至るも食せず。

この記事に見える与論・永良部出兵がいつ行われたものか不詳であるが、喜屋武間切（沖縄県糸満市）は三山時代では山南に位置しているから、与論・永良部出兵は三山が統一されて以降のことと考えられる。これに関連するか定かではないが、与論島に伝わる「アンジ・ニッチェーの話」では、与論島のニッチェー

に住む兄妹のうち、武勇に優れた兄アンジ・ニッチューは首里の王に仕え、按司に任じられたが、与論に帰島後、王府に置いてきた弓を王城に忍び込んで取り戻した。王は怒って、千人の兵を与論に差し向けて兄を殺し、さらに翌年には精兵千人を差し向けて、妹インジュルキを殺した、と伝えられている（栄喜久元 1988）。大島や加計呂麻島で見られるように、与論・沖永良部でも琉球王府の支配に対する抵抗・反抗が起こっていた可能性は高く、これがこのような伝承記事につながると考えられる。

ルイス・フロイス『日本史』に取める 1552 年のコスメ・デ・トルレスの報告には、薩摩国は非常に山が多く貧乏なため、その国の人びとは八幡（倭寇のこと）といわれる職業に携わり、シナの沿岸や諸地域へりやくだつろかく掠奪幽獲に出かけているとあって、「日本図」を取める中国で著された諸資料には、嘉靖二年（1523）の「日本国考略」、嘉靖四十年（1561）の「日本図纂」、嘉靖四十一年（1562）の「籌海図編」、嘉靖四十五年（1566）頃の「日本一鑑」などがあり、いずれも活動を活発化させていた倭寇への対応のために編まれたものである。

発掘調査から、与論城は 14 世紀後半から 15 世紀中頃が主体とされるが、その後も与論城の石垣は高い防御機能を持ち続けていたはずであり、琉球との争いや倭寇などに対しても一定の役割を果たした可能性が高いと考えられる。その一方で、耕地・風葬墓や宗教施設としても利用されるようになっていった。

参考文献

- 荒川浩和 1998 「正倉院の螺細」（『正倉院紀要』20）
池田榮史 2019 「琉球列島史を掘りおこす」（中世研究会編『琉球の中世』高志書院）
石上英一編 2014 『奄美諸島編年資料 古琉球期編上』吉川弘文館
イビソク関西支社 2017 『平安京左京五条三坊七町跡・烏丸綾小路遺跡』（京都市内遺跡調査報告第 15 輯）
亀井明德 2006 「南島における喜界島の歴史的位置」（『東アジアの古代文化』129）
小園公雄 1988 「中世」（与論町誌編集委員会『与論町誌』）
栄喜久元 1988 「民間説話」（与論町誌編集委員会『与論町誌』）
篠田謙一 2018 「DNA から西南諸島集団の成立」（高宮広人編『奄美・沖縄諸島先史学の最前線』南方新社）
高梨修 2005 『ヤコウガイの考古学』（同成社）
中里壽克 1995・1996 「古代螺細の研究」上・下（『国華』1199 号・1203 号）
永山修一 1993 「キカイガシマ・イオウガシマ考」（笹山晴生先生還暦記念会編『日本律令制論集 下』吉川弘文館）
永山修一 2007 「文献から見るキカイガシマと城久遺跡群」（『東アジアの古代文化』130）
野口才蔵 1976 「南島与論島の文化」（私家版）
真栄平房昭 2001 「東アジア海域と倭寇」尾本恵市他『海のアジア 5 越境するネットワーク』岩波書店
前村佳幸 2024 『遺老説伝』勉誠社
松尾秀昭 2017 「石鍋が語る中世・ホケット石鍋製作遺跡」（新泉社）
松原信之・野崎拓司・澄田直敏・早田晴樹 2015 『城久遺跡 総括報告書』（喜界町教育委員会）
森公章 2010 『遣唐使の光芒』（角川学芸出版）
山内晋次 2009 『日宋貿易と「硫黄の道」』（日本史リブレット 山川出版社）
山里純一 2012 『古代の琉球弧と東アジア』（吉川弘文館）

与論城跡と城集落

与論町文化財保護審議会 会長 麗 才良

1 暮しのなかの与論城・くんびら

(1) 日々の暮らしの中で

「パーパー・パーパー」、母国復帰記念碑周辺の高台のメグチバンタで二十七度線に向って叫ぶと、下の方からほどなく「ホーイ」と返事が返ってくる。気持ちがつながるホッとする一瞬である。

薄暗くなった下りの小路を小走りにおりて行くと、ほどなく「ミーガー・ミーガー（方言で「ありがとうと褒めること）」の声に迎えられて祖母二人に出会う。出会った途端、手伝う気持ちで祖母のついている杖を取りあげ、語り合いながら上り階段を一步一步登りつめていく。

中程まで登った所でお墓が見えてくる。広場の中心に家型の破風墓（写真1）が構えている。小路をはさんで右側の前方の崖の下には石が積み上げられた古い墓があり、その前方には仏像が安置されている。明和三年（1766）と記された、サンゴ石で造られた虚空菩薩像であると言う（写真2）。

ふと見上げるといまにも倒れてくるのではないかと思わせるほど傾いた大きな岩「ヤマラギシ」が目のかぶさってくる（写真3）。

疲れを感じ始めている足がとたんに急ぎ足になりその岩の下を通りすぎる。ヘアピンカーブを曲ってヤマラギシの背後に回ると、崖を背にして整ったもう一つの破風墓が目にはいる。この平地一面が墓地であり、この中央に切石積みで漆喰仕上げの破風墓が一面を凌ぐようにミーバカ（新しい墓）と名付けられ年を重ねた今もミーバカと呼ばれている。

ミーバカを登ると左右を岩壁にはさまれた切通しへいざなわれる（写真4）。まるで人工の技を思わせるような自然の造形にうならされる。ここを登りきると、パーパーと呼びかけたメグチバンタに登りつく。下の畑や海をながめながら、登り着いた爽快感が心地よい。私の少年時代の一日の思い出のひとつである。

この当時の階段には高い所と低い所があり、低い所は小振りな石が2～3段になっている。子供や女性は低い所を歩数を重ねて登るのである。この高低のある階段は先人の大きな知恵・遺産、ユニバーサルデザインであったと実感する。

一方西側の神社から下る道には城壁として築かれた石垣が残っている。下りていくと岩壁に沿うように風葬墓が続き、入口近くには大道那太（うぶどうなた）のクンジャンパーとサーギマートイのアダンパーの墓が上下に

1（方言で「祖母」のこと）



写真1 与論城跡内の破風墓（龍撮影、以下断りの無い写真は龍撮影）



写真2 与論城跡内の石仏（背面に明和三年の銘有り）

肩を寄せ合うように隣り合っている。

崖を降りたつた溜池の東奥には湧水があり、崖下の伊波地区で農作業をする人々の憩い・癒しの場であった。この一帯をシンゴヌメーという。

与論城の崖下に続く道は日々の生活道路であり、この道を通って畑や海に通ったものである。

伝承によるとメーグチパンタの東側の道は農業関係、商人が通った道、神社下の西側の道は役人が通った道といわれる。

さて、暮しのなかの「くんびら」といえば与論城跡で地主神社に奉納される与論十五夜踊りが、戦前、戦後の高度経済成長期まで島の人々の楽しみであった。

当時は、まだ娯楽が少なく十五夜踊りは人々の楽しみであり、社交の場で着飾って出かけたと、栄誉町民の故菊千代さんがなつかしげに語っていただいた。(令和4年1月に 94 歳で永眠)

また、私の少年時代は十五夜踊の前になると城地区の小組合が持ち廻りて祭主、二番組、一番組のサークラを建てるのに各家庭から物干し竿やムシロを持ち寄って建てていた。そのサークラがシヌグ祭りのサークラと似て祭りにいざなう風情をかもちだしていた。

この地域の奉納の風景は、昭和四十六年(1971)与論十五夜踊りが県の無形文化財に指定されたのを機に教育委員会が行なうようになった。今にして思えば、暮しのなかから祭りと地域のからみが、ひとつほどかれた感じである。

神社境内は子ども達にとっては日々の遊びの場であり、様々な工夫をして楽しんでいた。

また、神社に対する地域の信仰心も厚く、癒しの空間である。明治三十年生まれの私の祖母は地主神社に登る階段は不浄の身では登ってはいけない聖地であると崇めていた。地域の故老は、神社のある台地からは花や石ころを持ち帰るなど言われていた。

2 地域のなかの与論城・くんびら

ここでは神社の台地部を中心に時代の流れに沿って与論城に地域がどう関わってきたのか概要を集約する。

なかでも与論城の大きな変容は神社と墓地の建設である。神社については地主神社の由緒書に沿って紹介する。



写真3 ヤマラギシ



写真4 メーグチパンタの切通し

(1) 地主神社

明治維新の廃仏毀釈で高千穂神社を建立する際、各地区のシヌグ祭りやウンジャン祭りを禁止し、各拝所の神々を合祀し明治三年(1870)に辺後地(ピグチ)の拝所に小祠を建てて祭る。与論町誌には年表に明治四年(1871)に氏神を合祀して地主神社を建てる(増尾録)となっている。

昭和四十五年(1970)に地主・高千穂・琴平神社が改築される。いずれも島内外の有志の御芳志による。地主神社を改築する際に、境内から出土した遺骨を南側の辺後地御願の拝所に改葬安置され、その前方に大きな岩が置かれている。

この岩は故籠垣茂氏(神社改築期成会会長)の依頼で林経透氏が運搬したという。ハキピナ湾東側の通称ハミヌクビの前の窪地(チブ)にある岩を籠氏と林氏の二人で潜ってロープ掛けをした。「角をひとつも落とすな。俺は命懸けた。君も命懸けて頑張ってくれ」と、籠氏の激を受け、斜路に砂を敷いてブルドーザーで慎重に引き揚げ、運搬する車両や地主神社の階段にも砂利を敷き慎重に運び安置したという。籠氏が何故その岩を海の中から選んだのかは不明である。神の啓示か。この遺骨には王舅、北山王、築城時の技師などいくつかの伝承がある。

旧暦の三・八・十月の十五日に地主神社で豊年祈願祭が催される。この時の奉納踊りが与論十五夜踊で平成五年(1993)に国の重要無形民俗文化財に指定されている。

(2) 琴平神社

文政七年(1824)に龍頭付近に金毘羅大権現を勧請し、天保六年(1835)に巖島神社「市杵嶋姫之命」と菅原神社「菅原道真公」を合祀し、明治四十二年(1909)に地主神社の境内の現在地に移転された。伝承によると現在地は神社が移転されるまでは岩石が盛り上っており、整地をして神社が建設されたと言う。(沖宮司の伝承)現在の社殿は昭和四十五年(1970)に建設され、平成十四年(2002)に社務所が増築され現在に至る。

古老の伝承によると、現在の鳥居のある参道は神社建設に伴い設けられたもので、城としての城門は与論十五夜踊の祭主席の北側であったと言う。現在の門は昭和四十年代に再度整備されている。

琴平神社が建てられてから、人々は親しみをこめて「くんびら」と呼ぶようになったようである。私は、少年時代に土俵のある境内で大人に交って雨乞いに参加した。太鼓、タライ、一斗カン、カンヅメカン等持ちよって、それを打ち鳴しながら「雨たボーリ」と声を張り上げ土俵の廻りをまわった。私はカンヅメカンをたいたいた思い出が鮮明に残っている。

(3) 与論城の墓地

与論城のなかには時代を経て様々な墓地がある。断崖部の東西の通路沿いに古くからの風葬墓・掘込墓と破風墓や、明治時期に広まった大和式の墓石を建てる墓が崖や平場に存在している。明治期からは、台地部の忠魂碑から南側にかけて墓地が建てられるようになる。近年、崖下にある大和式のお墓は台地部に改葬(移転)する例が増えている。

(4) 戦後以降の与論城の移り変わり

①昭和二〇～三〇年代に与論小・与論中や茶花港(江ヶ島)の建設のため崖下の入口周辺から石を運び出したという。

②昭和四十年代に龍頭に沖縄を望む展望台が設置された。その際に龍頭の左眼の石積みが撤去されたのではないかとと思われる。

③昭和四十年代、故麓垣茂氏が中心になり、神主の岩村康弘氏が祈願して、断崖部の祀り主が分からない風葬骨を収集、安置する。

④昭和四十二年（1967）メーグチバンタに母国復帰記念碑建立（写真5）。碑文に「全国同胞の浄財と誠を結集しこれに石塔を建て万世に之を伝う」とある（碑は祖国復帰ではなく母国復帰記念碑となっている）。

⑤昭和四十五年頃、現在の忠魂碑の敷地の畑に高倉を移築する。当時は間を仕切っていた石垣が残っていた。

⑥昭和四十七年頃（1972）メーグチバンタの高台を砕石場として利用して、道路の敷砂利を生産していた。その跡は石積みが不揃いになっている（トレンチ5）。

⑦昭和五十三年（1978）忠魂碑移設・慰霊碑建立、土俵四本柱建設、土俵と現在の忠魂碑敷地を仕切っていた石垣の整理。この年に地主神社南側遊歩道に山口誓子句碑も建立される。

⑧昭和六十一年（1986）上野應介翁頌徳碑・口之津移住開拓民之碑を忠魂碑の横並びに建立（写真6）。この頃、茶花公会堂（現、茶花自治公民館）に建てられていた「大野好文県議会議員」の碑も同地に移設。

⑨平成五年（1993）サザンクロスセンター建設。この年、龍の口に「島中安穩」を祈願する仏像を設置。元全国与論会会長の故白井盛永氏が与論城で収納された遺骨をはじめ、島中の無縁仏を祀り島中安穩を祈願するために建立。

⑩平成五～八年（1993～1996）遊島風ランド事業で神社北側、与論十五夜踊保存館周辺の石垣の整備等を行う。

遊歩道の整備として復帰記念碑から山口誓子句碑までの整備と復帰記念碑（メーグチバンタ）より翔龍橋入口の道路までの整備を行う。この頃、西側の通路も溜池への取水路として整備がなされた。

⑪平成九年（1997）与論十五夜踊保存館の建設。

⑫平成十四年（2002）琴平神社に社務所が増改築される。

⑬平成二十三年（2011）NPOヨロン島・尊々我無が町の委託を受けて与論城を全面的に環境整美に取りくむ。これによって平成二十五年（2013）～平成二十七年（2015）にかけて赤司善彦氏らの九州国立博物館チームが測量調査を行ない、与論城跡の基礎調査を行う（赤司 2020）。



写真5 母国復帰記念碑



写真6 右から上野應介翁頌徳碑・口之津移住開拓民之碑、忠魂碑（大正年間作成）、満州開拓団の慰霊碑

その結果を平成二十七年（2015）、沖縄の建築情報誌「しまてい」に山本正昭氏が「与論城概観」を掲載する（山本 2015）。それに先立つ昭和五十八年（1983）県教育委員会の調査で与論高校の小園公雄氏が縄張り調査を行なっているが、草木が繁茂していたため全容を把握するのは困難をきたした。

⑭令和二年（2020）沖縄県立博物館・美術館で与論城跡の模型を作成。沖縄県立博物館・美術館のグスクに関する企画展で沖縄のグスクと共に展示。

以上、与論城の戦後以降の変遷の概略を列挙した。与論城の変遷は文化財としての観点より、地域の拠り所、憩いの空間「くんびら」として受け入れてきたと言える。



写真7 シンゴヌメー周辺の石積み、写真右下の方形の石組みと右端のバショウの間に石組みがあり、夫婦井戸の可能性はある（与論町教育委員会撮影）

(5) 古老の伝承

この他、明治三十一年（1898）生の故林清国の残した与論城に関する聞き取り調査の原稿に以下のような伝承が収録されている。

①夫婦井戸（ミートゴー）

樋口溜池の東側にある湧水が地域の人々のいやしの場であり、この一帯をシンゴヌメーという（地区14）。この湧水を境に石積みが残されており、今回の調査で城域に入っている。

故林清国の原稿には「湧水の上に井戸がある。さらに南下にももう一か所井戸がある。夫婦井戸（ミートゴー）という。泉はない。」と記されている。

地区14にはそれと思わしき石組みをした方形の穴がある（写真7）。

この東側にクンジャンパーから城内に通ずる道があり（地区13の通路）、昭和七年生まれの故基千代氏は、その道を「水汲み道」という伝承を語っている。

②門の推移

地区2の門については次ぎのような記述が残る。「現在の門は以前は高い石垣で囲われていた。入口は現在、祭りの時の祭主が座る座敷の北の角であった。今の座敷は現在の門を造るときにその石垣を使って造った。」。現在の門は神社の参道として整備された伝承。現在の形は昭和45年（1970）に神社をコンクリートに造営した時に整備されたという。

③城内に関する伝承

現在の土俵のある広場（地区2）の北西の角が門であったという伝承に沿って、その門に行くところ（地区4）に番兵の監視所と兵舎があり、その隣に軍馬飼育場があった（サザンクロスセンター南向い側、写真8）。

④城内に関する伝承2

東側の公衆便所のあるところから南側の墓地向かっては（地区4）、兵舎・炊事場・倉庫があった。

⑤ハマシチャの畑（地区9）の中央部から焼土や金屑が出るが、鍛冶屋の跡と思われる。

⑥現在の忠魂碑のある広場（地区2）は御内原（内宮）であったという。ここは、地主神社から東側に向かって、中央にあるモクマオーに沿って石垣があつて分離されていた。昭和五十三年（1978）、土俵の建設と併せて忠魂碑の現在の場所への移設や石垣の整理が行われた。

これらの伝承は故林清国氏が、城集落の明治初期～幕末生まれの古老（故酒井喜美静氏・故田中納弘氏・故立福静氏・故人禮納喜美氏・故上間兼一氏・故麓義弘氏）から取材とある。

⑦与論城跡の築城は11年かかったという伝承が地域の人に伝わっていたという（故林清国氏談）。このことから、与論城跡の築城は北山が滅亡した1416年から遡って1405年からと推定されたと思われる。



写真8 昭和30年代の与論城跡（東京与論会HPより引用）

3 現在と今後の与論城

(1) 与論城と境界

与論は沖縄返還運動の拠点となり、与論城は昭和三十八（1963）から昭和四十五年（1970）まで北緯二十七度線の海上集会、辺戸岬と与論島のかがり火集会を見守ってきた。

お互いのかがり火が確認できる指呼の間にありながら、ままにならない27度線上で復帰の熱い想いが燃え盛っていた。平成二十四年（2012）沖縄復帰40周年にあわせて沖縄県の国頭村と鹿児島県の与論町が合同で沖縄返還運動の海上集会とかがり火集会を再現する。

その後、友好を深めつつ、10年後の令和四年（2022）沖縄復帰50周年にあわせて海上集会とかがり火集会を再現（写真9）。その年の11月21日、沖縄県国頭村と鹿児島県与論町は姉妹都市盟約を結ぶ。

そして、現在は沖縄県と鹿児島県の行政の境界が与論城下の海には横たわる。



写真9 メーグチパンタから見た辺戸岬のかがり火、写真中の○枠内（与論町教育委員会撮影）

(2) 今後の与論城

今回の調査成果を踏まえつつ、今後の城内や周辺集落まで含めた更なる発掘調査や民俗関係の調査により、与論城跡の築城目的、どのような戦いを想定していたのか、労働力・兵力の確保など、次々と解明されることが期待される。

元宜野湾市職員の呉屋義勝氏と与論郷土研究会が共同で、与論城跡に連なる城・朝戸・西区集落にシニユグ祭などの祭場に中世並行期の遺跡を複数箇所確認（竹下他2017）。

与論城の東側・北側方面の防御対策において城郭遺跡と、その周辺に展開する集落遺跡との関係についても注目され、今後の調査の成果が待たれる。

さて、国指定の答申を受けた与論城であるが、近年町民の関心が高まりを見せており、以下の取り組みが与論城でなされている。

①観光関係による文化財としての価値を踏まえ、ガイドコースの設営に取り組んでいる。

②和歌山大学を中心に進めているアストロツーリズムの拠点として、与論城を中心とした地域の光害対策として防犯灯の改善（輝度の調整など）を進めている。

③近年、民間イベントが与論城を会場として次々と行われる。

- ・マージン防火デイ ・青空マーケット
- ・フェスティバル後の交流会 ・満月祭
- ・魚のト祭り ・こいのぼりの絵かきイベント

④神社を崇め、景観美化を目指した鳥居や土俵のペンキ塗り。

- ・民間が発信してボランティアで鳥居や土俵などを塗装
- ・塗装に出水市の松山塗装会社がペンキ提供等の協力

⑤城内で行われる与論十五夜祭を再びみんなの祭にするための工夫（写真 10）。

- ・会場周辺に屋台を設置し販売。
- ・与論十五夜踊をわかりやすく解説する取り組み。
- ・踊りの空き時間も楽しめるように地元アーティストのイベントを組み合わせる。



写真 10 令和5年旧暦十月十五夜で踊りの解説する筆者（左側、与論町教育委員会撮影）

このように島の人が与論城に集い、関心を持ち、親しんでいただけることはありがたいことである。今、国の重要無形民俗文化財である与論十五夜踊も人々に分かりやすく解説し、親しく観賞していただけるような取り組みだけでなく、学術的な面でも踊りについて調査研究が進められており、与論城の調査と併せて与論島特有の文化の発信につながることが期待される。

私達与論の人々は、ビッグチ御願をもとに与論城に秘められている幾星霜の先人の思いと汗と足跡を紐解き、「与論城は国の指定になるから価値があるのではなく、価値があるから国は指定する。町指定であってもその価値は変わらない。」という文化庁主任調査官の近江俊秀氏の言葉をかみしめ、国指定文化財としての誇りを共有し、島の宝を磨き続け未来へつなげたい。

伏龍よ はばたけ！ 与論城。

引用 HP

東京与論会 <http://tokyo-yoronkai.jp/>（2024年1月19日アクセス）

国土地理院地図電子国土 web <https://maps.gsi.go.jp/>

引用文献

赤司善彦 2020「平成 25 ～ 27 年度の与論グスクの調査と与論グスクの概要について」『明らかになる与論城跡発表資料集 令和 2 年度地域の特色ある埋蔵文化財活用事業に係る関連シンポジウム』与論町教育委員会事務局

竹下徹・竹盛直・内野優三郎・呉屋義勝・籠才良・南勇輔 2019「与論（ゆんぬ）の先人の生活跡を訪ねて！—2016・2017 年の遺跡分布調査の概要—」奄美考古学会編『中山清美と奄美学—中山清美氏追悼論集—』奄美考古学会

山本正昭 2015「与論グスク概観」『しまてい』No.73, 建築情報誌しまてい編集委員会

地理院地図
GIS Map



本稿で取り扱った与論城内の地名等の位置図（墓地や仏像除く）
（背景画像は国土地理院地図から引用したものを改変）

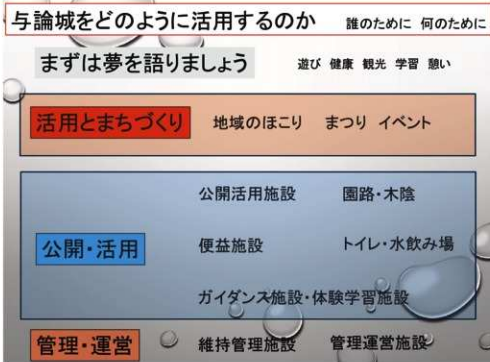
地理院地図
GIS Map



本稿で取り扱った与論城跡周辺の地名等の位置図（背景画像は国土地理院地図から引用したものを改変）

シンポジウム参加者の声

このページでは、トークブース2「地域の文化遺産としての城跡」で与論城跡に「こんなのがあったらいい」という会場の参加者から意見や、進行を行った大野城こころのふるさと館赤司館長や講師、オブザーバーからのコメントの概略をまとめたものです。



トークセッションのコンセプト（赤司館長の発表スライドより引用）

【ガイダンス施設の入口に映像展示】

- ・近年多用されている手法でインパクト、掘みはいい（赤司館長）。
- ・一方で一度見ると飽きられることや映像の更新・メンテナンスといった維持管理の負担が課題（赤司館長）。

【模型（地形・復元・石積み）】

- ・おすすめ。全体像の可視化ができるので一般の方でもイメージができる（赤司館長）。
- ・整備を行う際は遺跡の現状のまま整備することが基本なので、石垣の高さなど「想定される遺跡の様子」を模型で示すことができる（赤司館長）。
- ・石積みの模型があった方が沖縄のグスクとのつながりがイメージできる（参加者）。
- ・城内には現在は公園整備で埋められてしまった岩の間の通路を始め、いくつか通れる道（通路）があった。また、下から見上げると城の範囲や状況が良く分からない。こういったことが伝わるようにするためにも模型や看板などがあって欲しい（参加者）。
- ・昭和40年代までガジュマルなどの木は薪や家畜のエサとして使っていたので、与論城跡のある岸壁も今のように鬱蒼としておらず、崖下にある伊波の集落からは石垣が見えたと言う。この岸壁が見える様子が分かるようにする意味でも模型などは必要だと思う（館会長）。
- ・沖縄県立博物館・美術館から借用している模型も素晴らしいが、地形変化などがわかるようにもっと大きいもの（200分の1）が欲しい（参加者）。
- ・サザンクロスセンターがある上の駐車場の方や、城内の平場にも模型などの現在の状況が分かるものがあると良いと思う（参加者）。

【展示物】

・目を引く展示のレイアウトも大切。銀座のエルメスの展示は分野は異なるものの発想やコンセプト・見せ方は参考になる（赤司館長）。

【展望台・テラス】

・与論城跡の売りは眺めの良さや断崖の迫力なので、臨場感や没入感がある展望台があると面白い。部分的に崖側に伸びている台など（参加者）。

・展望台から下にゴミを捨てるマナーの悪い人もいるので、そこは気を付けた方が良いと思う（参加者）。

【看板】

・入口の説明看板も大切だがパンフレットなども併設しているのも良いと思う（赤司館長）。

・崖下から見上げた様子や道沿いからでも分かる看板が欲しい（参加者）。

・インバウンドのお客さんも増えてきているので、多言語対応の看板を整備して城跡の価値を広めて欲しい（参加者）。

・城内をガイドで案内する際、現在の場所や調査成果を説明する際に看板などがあつた方が助かる（参加者）。

・これまで保存の経緯や携わってきた先人の思いを伝える意味でも、これまでの経緯を記した看板があつた方が見て回る人が城跡を大切にしてくれると思う。人伝えの説明だけではいつか忘れられてしまうので（参加者）。

【散策路等の整備】

・散策路や巡検するコース設定があると周りやすい（参加者）。

・ゾーニングしてあつた方が案内もしやすい（参加者）。

・今生えている大きな木を利用してアスレチックのようにしても面白いと思う（参加者）。

・木陰は夏暑いので大切（参加者）。

【フォトスポット】

・フォトスポットがあると SNS でアピールすることが出来るので、若者を呼び込むきっかけになる（観光協会町岡）。

【アート】

・城内の環境整備で伐採をした後の枝や丸太が結構あるので、その材木を利用したオブジェがあつても良いかも。また、昔の城跡や与論の風景が見れる場所もあつて欲しい（参加者）。

・モニュメントの置いてある地域の人が集まれる広場があつても良いと思う。地域の人と一緒にを行うアート活動も面白いと思う（参加者）。

7 ガイダンス施設 石積み模型展示



28-2 カフェ



32 地域住民主体のイベント



活用事例の写真（赤司館長の発表スライドより引用）



文化財

CULTURAL PROPERTY

編集・発行 与論町教育委員会事務局 生涯学習課
印刷 株式会社 奄美新生社印刷
発行年月日 令和7年3月